

座談会 強・用・美の進化

- サステナブル時代の豊かさとは 第4回
海外レポート
- 良質な建築、これからのまちづくり
建築家資格制度を考える 第3回
- 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第4回
- 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第8回
卒業設計をふりかえる
- Meaningful Garden 第4回
- JIA 建築家大会 2023 東海 in 常滑
温故知新
活動報告
学生の会 @joint 活動報告





快適で環境にやさしい カーペットに挑戦し続ける

株式会社スミノエは、住江織物株式会社のインテリア事業を担う会社として1998（平成10）年に設立。カーテンやカーペット、業務用床材をはじめ、伝統技術を要する緞帳なども製造・販売しています。住宅向けに限らず、公共施設やオフィス、ホテルへも数多く納入し、国会議事堂や迎賓館にもスミノエのカーペットが採用されています。営業拠点は北海道から九州までの全国にあり、他分野の繊維製品を扱うグループ会社とも協力して、あらゆる市場のニーズに応えています。会社の歴史や取り扱い商品について、村瀬典久社長にうかがいました。

先駆者としての誇りを胸に

当社の母体である住江織物は、米穀商であった村田伝七が大阪住吉で商売をするかたわら、1883（明治16）年に^{だんつう}緞通機を購入して緞通づくりを開始したのが始まりです。伝七は大変研究熱心で、緞通の技術が認められ、国会議事堂の前身である帝国議会議事堂のカーペット製造を受注。その後、京都を走る路面電車や国鉄の座席シート地にも採用され、本格的な工場を建設するまでに成長しました。

現在は、インテリア、自動車、鉄道・バスなどの車両内装、機能性資材、美術工芸織物など事業も広がり、創業140周年を迎えた2023年には関連企業の総称をSUMINOE GROUPとして新たなグループ理念を策定。事業を超えた連携や新規事業にも挑戦しています。

水平循環型リサイクル タイルカーペット「ECOS®」

SUMINOE GROUPのインテリア事業を担う当社スミノエは、カーテンやカーペットを中心に、一般のご家庭から公共施設、ホテル、病院、オフィスまで、デザイン性と機能性を備えた商品を幅広く取り扱っています。また、伝統の手織りの絨毯や緞帳をつくることのできるのも強みです。

近年は環境対応型の製品の販売に力を入れており、その中でもタイルカーペット「^{エコス}ECOS®」はエコマーク認定基準を大きく上回る再生材比率を実現した商品として高く評価されています。



麻布台ヒルズ森JPタワー オフィス
水平循環型リサイクルタイルカーペット
ECOS® LX-2703

廃棄するしかなかった使用済みタイルカーペットの裏材をリサイクル工場でパウダー化し、もう一度新しいタイルカーペットを生み出す水平循環型のリサイクルシステムにより、バージン材の使用を低く抑え、エネルギー消費とCO₂排出量の削減に貢献。このリサイクルへの取り組みは「^{エコス}ECOS®」が発売された2011年から続けており、今では当社のタイルカーペット全てがこのリサイクル専用の製造ラインでつくられています。

昨年には裏材だけでなく表面にリサイクルナイロン糸を使用した「^{エコス}ECOS NEO™」シリーズを発売。世界最高水準の再生材比率81%を実現しています。

もう一つの大きな取り組みは、2020年から「^{エコス}ECOS®」全製品のパイル糸を



オークラ プレステージュタワーロビー
別注フックドカーペット

「原液着色糸」に切り替えたことです。環境負荷の多くを占める染色工程を撤廃することで、当社グループ工場での水と電気の使用量、排水の削減を実現するとともに、糸の発色の美しさ・耐光性・耐薬品性に優れた特長があります。

フロンティア精神の継承

創業当時から、新しい発想で新しいことにトライするのが当社の社風であり強みです。業界に先駆けて環境に対して取り組んできたのもその現れです。

カーテンやカーペットの消臭加工技術として始まった「トリプルフレッシュ® II」を、壁紙や家電製品の消臭フィルターに活用するなど、事業の垣根を越えて新たなものづくりに挑戦し続けています。



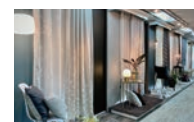
SUMINOE 株式会社スミノエ
GROUP

<https://suminoe.jp>

カーテン、業務用カーペット、一般家庭用カーペットなど、各種インテリア製品の企画・販売を行う。

本社 大阪市西区新町2-4-2なにわ筋SIAビル6F TEL: 06-6537-6305
東日本支社 東京都品川区西五反田2-30-4 BR五反田ビル4F TEL: 03-5434-2928

■東日本支社BR五反田ビル3F「スミノエショールーム」へぜひお立ち寄りください。



ショールーム東京

目次

●特集

4 座談会

強・用・美の進化

古澤大輔 リライト_D / 日本大学准教授
松岡 聡 一級建築士事務所 松岡聡田村裕希 / 近畿大学教授
田村裕希 一級建築士事務所 松岡聡田村裕希 / 東京工科大学准教授
小山 光 キー・オペレーション

●コラム

- 10 サステナブル時代の豊かさとは —フェアウッドと地域材で未来を切り開く— 第4回
フェアウッドで未来を変える 佐藤岳利事務所(元ワイズ・ワイズ) 佐藤岳利
- 12 海外レポート 中東の時代変化と新しい建築 日本製鉄 知見徹摩
- 14 良質な建築、これからのまちづくり JIA 建築家大会2023東海 in 常滑 まちづくりワークショップ企画
まち歩き常滑の「たから」と「あら」を考え提案をしよう! AMBIENCE ARCHITECTS 一級建築士事務所 松村哲志
- 16 建築家資格制度を考える 第3回 シンポジウム「資格制度のこれから」を終えて 梓設計 安川 智
- 18 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第4回 当事者に聞く 審査から設計レビュー
設計者/発注者支援者 座談会 後編 設計レビューの意義
- 20 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第8回
法令違反の建築物の設計に関する責任について 山崎哲法律事務所 安藤 亮
- 21 卒業設計をふりかえる 人生を紡いでくれた卒業設計 SUEP 末光弘和
- 22 Meaningful Garden ~意味に満ちた庭~ 第4回 スタジオ・ダニエル・リベスキンドにて アイダアトリエ 会田友朗

●ひろば

- 23 JIA 建築家大会2023 東海 in 常滑 参加レポート / JIA 全国学生の会@joint サミット
ihmrk 井原正揮 / 日本大学大学院 長谷川理奈 / 日本大学 伊藤綾香 / 日本大学大学院 奥平康祐 /
東京電機大学大学院 小山満大 / 東京電機大学 高橋花穂
- 26 温故知新 先達に学ぶ 私の建築人生を振り返る 野生司環境設計 野生司義光
- 27 抱負を語る 改修設計での学び 長友建築研究室 長友寛昌
抱負を語る 雪が降る日のこと 海法圭建築設計事務所 海法 圭
- 28 活動報告 交流委員会Aグループ 建物見学会開催 —東京スカイツリー天望台見学— 横森製作所 梧桐直人
- 29 交流委員会Eグループ 納涼屋形船施設見学会開催 中電工 石津浩章
- 30 学生の会 @joint 活動報告 第2回まち歩き「東京サイハッケン」を開催しました!
次世代のタマゴたち 竹と土の「わたしたちの空間」 昭和女子大学 小柳日菜子
東京工科大学 工藤考史

●あとがき

- 31 ひといき 瓢箪から駒が出た 萬野光雄建築設計事務所 萬野光雄
- 2 パートナーズアイ 株式会社スミノエ 快適で環境にやさしいカーペットに挑戦し続ける

表紙写真: 上 「特集: 強・用・美の進化」の座談会風景

中 建築家大会2023東海 in 常滑 まちづくりワークショップ企画「まち歩き常滑の「たから」と「あら」を考え提案しよう!」の様子

下 常滑 陶楽窯の煉瓦 (撮影: 井原正揮)

公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

<https://www.jia-kanto.org/>



座談会

強・用・美の進化

2023年度は「強・用・美の進化」を年間テーマに、夏号では「強」、秋号では「用」、冬号では「美」についてそれぞれ3組の方にその捉え方や考え方を書いていただきました。最終回である今号では、執筆いただいた中から4名の方にお集まりいただき、担当されたテーマを越えて「強・用・美」についてディスカッションしていただきました。

- | | | |
|-----|-------|-------------------------------|
| 参加者 | 古澤大輔 | ライト_D / 日本大学 准教授 |
| | 松岡 聡 | 一級建築士事務所 松岡聡田村裕希 / 近畿大学 教授 |
| | 田村裕希 | 一級建築士事務所 松岡聡田村裕希 / 東京工芸大学 准教授 |
| | 小山 光 | キー・オペレーション |
| 聞き手 | 関本竜太 | 『Bulletin』WG |
| | 佐久間達也 | 『Bulletin』編集長 |
| | | 『Bulletin』WGメンバー |



左から、田村裕希氏、松岡聡氏、関本竜太氏、佐久間達也編集長、小山光氏、古澤大輔氏、田口知子広報委員長

「本能的な美」と「考える美」

関本●本日は、夏号で「強」について書いてくださった古澤大輔さん、秋号で「用」について書いてくださった松岡聡さんと田村裕希さん、冬号で「美」について書いてくださった小山光さんにお集まりいただきました。まずは簡単に自己紹介をお願いしますでしょうか。

小山●設計事務所キー・オペレーションの小山と申します。「美」について書かせていただきました。普段は商業建築の仕事が多いのですが、最近は商業以外の仕事もしています。

古澤●「強」を担当しました古澤です。ライト_Dという設計事務所をやっています、日本大学の理工学部で建築を教えています。僕は「両義的な躯体の姿」というタイトルで文章を書かせてもらいました。建築に限らず事物の両義性について興味があるので、両義的な状態とはどういうことなのか、あるいは両義的な状態が示す可能性とはどういうものなのか考えながら設計しています。

松岡●一級建築士事務所松岡聡田村裕希を主宰しています松岡です。「用」を担当しました。普通、設計するときには有用性は考えていることなので書きやすいかと思ったのですが、ひと通り網羅的にも、自分たちの作品で特別考えていることも言いたいと思ったので、書きやすそうで難しかったというのが実感です。

田村●田村です。皆さんの文章を拝見して、「美」について書くのが一番難しそうだと思いました。ただ、皆さん書いているように、「強・用・美」という3つがどれも建築の中で絡

み合っているということには同意だなと思いました。

関本●皆さん難解なお題に対して本当にさまざまな視点で執筆してくださいました。他の方の文章を読まれて、どんな感想を持ちましたか。

小山●やはり「用」が意匠設計上王道の部分で、施主に対しても、どんな建物を建てるのか計画を最初に説明するのがメインストリームだという気がしました。「強」は、直接的な「強」ではなく、解釈も含めた「強」に興味深く読みました。例えば、伊藤暁さん(夏号で「強」について執筆)は、構造フレームの中でどのようなフレキシビリティを持てるかを、軸組模型を示しながら書かれています。古澤さんも、事例として出されている自邸はRC造ですが軸組ですよ。材料は違いますが、どちらも軸組で語っているのが面白いと思いました。

松岡さんと田村さんは用途の変更の可能性について書かれています。最初から変更を想定して設計するのは難しいと思うのですが、伊藤さんも30年後、40年後にその建物をリノベーションすることを考えて、いろいろな解釈ができる状態のものをつくらうとしている。つまりそれは許容力ですよ。 「強」と「用」は意外と密接にリンクしているなと思いました。

そしていざ自分が「美」について書くときに、「美」だけすごく切り離された感じがしてとても悩みました。「強」と「用」はロジックが組めて、施主にメリット・デメリットを比較的伝えやすいのですが、「美」はあまりにも主観的すぎて、「美」だけで語るのはすごく難しいです。今回「美」を書くにあたっていろいろ本を読んでいる中で、合理的だからではなく、アンバランスでも美しいと感じる本能的な「美」もあるのだら



桜木町の集合住宅

関内の集合住宅

神田テラスビル

撮影
左、中 矢野紀行写真事務所
右 小川重雄

うなと思いました。心理学者のデニス・ダットンは、人間が美しいとか美味しいというように魅力を感じるものは、意外と人類がまだ原始だった頃から通底していると言っています。考えてみると、ロジックを組んだ状態を楽しみながら感じる美しさと、なんのロジックもないけれどなんかいいと思うのは、違うんですね。ソーシャルメディアはそこが分かりやすく、自分の作品を全然知らない不特定多数に対して出しているものなので、そこでなぜバズったのか考えると、たぶん本能的に美しいと感じたのだらうと思っています。

古澤●確かに「美」は「強」にも「用」にも内包されていて、いちばん切り離して語れない要素かもしれないですね。でも小山さんは、最初に「強」と「用」は定量的な基準であると断言して「美」は定性的と言いつつ、最終的にはSNSの反響のインプレッション数で「美」を定量化しています。

小山●そうなんです(笑)。「美」を定量基準に差し戻そうとしている。何かしら根拠がほしかったのです。

古澤●でも、「本能的な美」と「考える美」を対比的に扱っていて、「本能的な美」は、それでもやはり定量的な部分からこぼれ落ちるような、定性の領域にあるものと捉えていますよね。建築界の人と一般の人の評価も対比的に扱っていますが、一般の方に届く「美」を追い求めることの可能性って一体何なのでしょう。

小山●建築界の人は設計者の意図を比較的理解してくれていて、コンテキストの中からその建物を良い、もしくは美しいと思ってくれます。一方、一般の方は、そういうコンテキストが全く分からない状態なので、見ているのはビジュアルなんです。だからそういう意味でいくと「本能的な美」はインプレッションなんです。写真でもいいのですがぱっと見たときに、これ何だろうと思う印象で、その可能性は何かというと、僕は愛着だと思います。建物が取り壊されるときに、建築界の方々がそれに対してすごく価値を見出しているから反対をするのだけれども、一般の方々の支持は得られなくて壊されてしまうことがあります。その建物が一般の方が見て愛着が持てる「美」を備えていたら、残せる可能性が高かったのかなと思いました。

遅れて現れる「美」

松岡●以前田村の提案で、Web上にあふれる世界中の建築写真を分類し、どういったものがよりインプレッションを与え、良い作品として目に映るのか考えてみたことがあります。例えば、ぱっと見て瞬間視的に「なにかいい」と感じるもの。

その中にもきらびやかで美しいものもあれば、不思議と目を引かれてキャプションを見て答え合わせができるものもある。または周辺との関わりでできている周辺視的な「美」や、すごく巨大または広大なパノラミックな視点など、対象を捉える視点によって分類しました。今の小山さんのお話をうかがうと、それに加えて愛着とか、なんかほっとする、行ったこともないのに懐かしいと感じる意味論的な「美」もあると思うので、「美」の定義は広くて、これからの建築を捉える上で「美」は中心的な話題であるような気がしています。

古澤●キャプションで理解する「美」というのが、きっと小山さんの「考える美」と近いですね。でもそれっておそらく、定量/定性の区分を超えて事後的に遅れてやってくる「美」で、そのタイムスパンが数分とか1時間、数ヶ月という単位もあれば、数年、数百年単位で蘇ってくる「美」もあると思うんです。それがむしろ本当に根源的なプリミティブなものだとした場合に、いつの段階で理解されるのか全く予想できないわけですよね。設計者としては、種を蒔くようなつもりで設計するというのが、ひとつヒントになりそうです。

その時間差という文脈で言うと、松岡さんたちは「媒介としての用」というタイトルで書かれていますが、それも事後的に現れる「用」ですね。媒介ですが、何か変化を受け止める器として「用」を見ている。つまりある種のメディアとして「用」を見ていて、事後的にどうなるか分からないけれども、立ち現れてくる、そんな「用」があるのではないかということですね。実例として挙げている「コートハウス」も「用」のきっかけを散りばめていくような空間になっていますし、「裏庭の家」では逸脱したスケール操作というか、生活の「用」には絶対合わない大きさの階段を置くことによって、後から「用」が出てくる。それは遅れて現れる「美」と全く同じメカニズムのような気がしました。

松岡さんと田村さんは、「用」の中でも美しいもの美しくないものがあるとした場合、どういう「用」を美しいと思われませんか。

田村●「強・用・美」ってどれも何かを語ったり評価するときの基準なんですけど、何かをけなす基準にもなるような気がします。美しすぎて美しくない、使い勝手が良すぎて普通だね、というように……。でも、建築作品の評価として「面白い」ってよく言いますが、面白すぎて面白くないということはあまりないと思うんです。

小山●それすごく分かります。全てが完璧にできているとたぶん面白いとは感じなくて、何かが破綻しかけているのだけ



古澤邸

撮影
左、中 Takeshi YAMAGISHI

ど成り立っているほうが面白いと感じるのだと思います。構造ももしかしたらそうかもしれませんね。キャンチレバーに惹かれたり。「用」も、別になくてもいいものが存在したり、それによって生まれるものを面白いと感じる気がします。

田村●面白いと感じるのは割と事後的だと思うのです。これってこういうふうに使えるかなとか、こんなふうになる可能性あるね、というように。僕らは2人で設計しているからかもしれませんが、徐々にそういうものを発見していくときに面白いと思うところがあります。

古澤●面白い面白くないというのは紙一重で、そう考えると美しいと醜いも紙一重。それは侘び寂びとか、日本の古来の感性として根付いているのだと思いますし、どちらにもすぐに反転してしまう状態をどう設計するのかがやはり一番難しいところですね。

松岡●例えば、「美」から発想された無用のものも、実はいかにも「用」な建築に転換することもありますよね。巨大な階段をつくれば無駄だと思ってそこに物を置きだすし、その置き方は使用者なりに不便じゃないように「用」の発想で置かれるわけです。住人によってだんだん設えられていく。その余地をつくっているきっかけは「美」であることもある。

小山●確かにミニマリスト的な美しさのある建築もありますが、僕が求めている美しさはもう少し生々しいセンシュアルなものかもしれません。何もひだがない美しさというよりは、何かがちよっとほころびかけているような、突っ込みどころがたくさんあるものに面白さを感じる部分はあると思います。

田村●小山さんの“愛着が生まれる瞬間”というのは、どちらかというと、そういう瞬間かもしれません。

小山●そうですね。愛着は個人でみんなバラバラなので、その最大公約数的な解が出せないから建築は難しいし、すべてのものがそう言えるのだと思います。ただ結局建築って、個人邸を除いて、不特定多数の方に受け入れてもらうことを考えなくてはなりません。そのときに、ひだの深さはどれくらいだとか、その感覚や価値観はすごくずれもあるし、正解も多分ないので、設計していく上でそれを考えなくてははいけません。

古澤●ひだの多さと万人受けというのは、本来的にバッティングするのがまた難しいところですね。

田村●小山さんは立面の検討をするときに、平面も変えることはあるんですか。

小山●立面は独立させてつくっています。例えば、「桜木町の

集合住宅」も「関内の集合住宅」もそうですけれど、実際のプランからあえてファサードをずらしています。マンションなどは中のプランは変えられないので。

古澤●容積などに関係ないところで、ファサードデザインを担保しているのですね。小山さんは商業建築のキャリアが長いのでその操作の線引きみたいなものをコントロールできるので、建築写真もすごく美しいんですね。

人間の可能性を拡張するような設計

田村●古澤さんのご自宅は、住まわれながら梁などの意味を発見されていくプロセスがすごく面白いと思いました。フロアによって梁と床との関係が少しずつ違いますよね。

古澤●最初は梁は完全にランダムになるようにスタディしていたのですが、フロアの中に梁が来た方がむしろランダムに見えたので、あとは構造的に決まってくる寸法を決めた上で、そこからずらすように上下に振っています。それは内部から見たときに下の空間を見やすくするのか、上の空間を見やすくするのかでフロアごとに考えています。

田村●例えば梁はこれぐらいの高さだったらテーブルになるということ想定されていたのでしょうか。

古澤●使い方を一切排除して設計したのでそれはありません。驚かれるかもしれませんが、日頃から廃墟みたいなものをつくりたいと思って設計しています。なので、使い方や強さ、あるいは美しさが判断基準からも棚上げされているような状態がくれたら、それは1つの建築の可能性なのではないかと思っています。でもそういう建築をつくれるシチュエーションってなかなかないですね。だから自分の家でまずは実践してみて、今はそれをクライアントワークでも提案するようにしています。

関本●古澤さんの建築のつくり方をメジロスタジオ時代から拝見していると、設計の決定を自分以外のものに委ねるような設計手法のように見えます。「古澤邸」も、僕だったら梁は使いやすいところに置きにってしまう気がします。古澤さんは設計の意思決定を意識的にご自身から切り離しているのか、そのつくり方に非常に興味があります。

古澤●今関本さんがおっしゃったのは、昔自分が実践していた手法で、不動産の間取り図から考える設計方法です。感覚としては概念上のリノベーションでした。僕の好きな「アルルの円形闘技場」が集合住宅に転用された銅版画があります。アルド・ロッシの『都市の建築』の挿絵になっている図版です。そこに描かれた世界は先行形態があり、その特徴が残つつ



コート・ハウス



裏庭の家

も全然違うとても豊かな状態になっていて、ある種の形態の決定が無根拠になっている状態で、無根拠の根拠性と言ってもいいかもしれません。私たちの世界は今すぐく同一化されるバイアスがありますが、その図版には同一化を逸脱してくれるような、そんな自由さがあるのです。

だから、普通の不動産間取り図の2LDKを、概念上リノベーションして、2LDKは残ってるけれど全然違った形態になるということを思考実験的にやっていました。これはまだ20代後半の頃で、間取り図だからこそクライアントにも同意してもらいやすいので一石二鳥だったのですが、うまく言語化できなかったんです。それをもう少しきちんと実験してみようというのが今のフェーズです。

無根拠の根拠性というのが、人間の可能性を発展させ拡張させてくれる原動力だと思うんです。「裏庭の家」の階段にはそれをすごく感じます。あれはリノベーションされているなと思っていて、無根拠なんですよ。

松岡●一応根拠はあるんですけどね(笑)。

古澤●無根拠という根拠性がある。あの階段は廃墟だなと思いましたね。

「用」が宿るところ

松岡●先ほどのお話の通り、建築は強固で固定的で、変更不可能なものという物質的な力学に加えて、柔軟性もあります。例えば山荘のように、ただ屋根と壁さえあって食事をして、同じ場所で雑魚寝ができればいいような弱さも含んでいます。その両方を建築と呼んでいるところが面白いんです。だから決して強固な部分だけを対象に使いやすくする必要はないと思います。「用」の柔剛をどこで折り合いをつけるか、その過程の始まりをつくるのが大事だと思っています。

さらに、「用」が宿る部分も大事で、それが例えば柱梁や床というエレメントなのか、または普通は使い方が決まっている室やコーナーなのか。いずれも物理的なものを入れることでしか設計者は応えられないと思います。「裏庭の家」では階段材料のギリギリの薄さを狙いながら大きなものをつくることを意識して、「用」の取っ掛かりになるのではないかと考えました。

古澤●「用」が宿るといふ表現は面白いですね。なんか依り代みたいなもので、神が宿るようです。

松岡●そうですね。一応階段というなじみのある名前が付いていることも大事です。

古澤●ギリギリ階段と呼べるような。階段って気づかれるの

にちょっと時間がかかるんですね。

田村●実は最初確認申請に出した時に、「階段はどこですか？」と質問されました。

古澤●それは素晴らしいですね。ちなみにその「用」が宿るときのタイムラグはどれくらいのスパンで考えていますか。

松岡●これが悩ましくて、設計時に「用」を設定しないわけにはいかないとは思っています。使い方は分からないけれど意図なくつくったものは建築ではないと思っていて、やはり建築は「用」について必ず意図や目的を伴っていかなくては行けない。それは設計者がよく考えて提示する必要があると思うのです。ただそれは一瞬で上書きされて変更されていくことを許容していないといけないという感覚はあります。

小山●それは設計期間の中で、松岡さんと田村さんがキャッチボールのようなやり取りをしながら用途を重ねていくのでしょうか。

松岡●僕と田村の間ではあまり使い勝手の話はしません。施主とのキャッチボールですね。

田村●「裏庭の家」の大きな階段も、施主がだんだん理解していきました。この階段はなぜこんなに大きいんですか？というところから始まり、話しながらだんだん使い方を発見していくのです。そこに立ち会えるのが面白くて、そのプロセスには結構時間をかけています。

佐久間●松岡さんと田村さんの文章にはスケールという言葉が何度も登場します。小スケールの下屋とか大きな階段、家具のスケールという表現もありました。そのあたりが松岡さんたちの設計におけるキーワードなのかなと思いました。

松岡●何をコントロールしておけば着せがましくないか考えた時に、ギリギリの何かではなくて、中途半端だったり大きくつくことは、我々の設計において大事なところかもしれません。少し小さめだから使い方を変えなくては行けなかったり、大きすぎるから普段と違う使い方を生んだり。このスケール調整のようなことは、もしかしたら「用」の更新を促すには重要なかなと思っています。

小山●スケールを変えたときに感じる違和感が何かの取っ掛かりになっているんですね。

松岡●はい、着想はそうです。

田村●スケールのことを語りたくなるプロジェクトは、実はだいたい小さいスケッチで考えるところから始まっています。

小山●それはスタート時点から違和感しかないですね(笑)。

古澤●慣習的なイメージを異質化させるというか、見ているものと、見ていると思っているものの癒着を解くような操作

ですね。それによって階段が持っているイメージが別のイメージに変化するから、大げさな表現かもしれませんが、「世界が折り開かれる」という言い方が合っているように感じます。それが小さなスケッチから生まれるというのがまた面白い。

小山●そう考えると、やはりキーワードは「違和感」なのでしょうね。僕のSNSのインプレッションの話でいうと、見た人は多分何かしら違和感があって、引っかかっているひだがあるのでしょうか。例えばすごく美しいペットボトルがあったとしても、見慣れると普通になってしまいますよね。やはりひとひねりしたのを見たときに何か波風が立ち、それが何かの発端になるのだと思います。

古澤●そう考えると小山さんの「関内の集合住宅」も相当違和感があります。物質レベルで言うと、ファサードのコンクリートはなぜこんなに薄いんだと、通り過ぎた人はみんな頭の中で考えますよね。

小山●そうですね。実際、建築界の方からは反響は大きかったです。

関本●「裏庭の家」の写真を見ると、コンセプチュアルな感じもしますし、試行的な実験要素があるので本来は「考える美」の方なのかなと思うのですが、ただ何も説明されずとも一瞬にして引き込まれるような魅力もあります。松岡さんたちはご自身の建築を「美」という観点で切ったときに、どういふものを美しいと捉えているのでしょうか。

松岡●施主に引き渡す前に2日間その建物にもって記録撮影をしています。そうすると模型では見えてこなかった発見がたくさんあったんです。視点を十数センチ動かすだけで、その建築が全く別のものに見えることってありますよね。これまでもう十分凶面を描いて、模型でも検討してきたものが、たった2日でまた新しい顔を見せてくれる。それは建築の「美」であり、建築の魅力だと思います。その感じ方や視点をどう建築の中で指定していくのかについては、今後建築を魅力的にする、つまり「美」を考える上で非常に重要なことなのかもしれません。

古澤●名前が付いているものは違和感がないもので、名付け得ないものはすごく違和感があるとも言えます。多木浩二が、「名付けられてしまった瞬間に物は死んでしまう。名前がない状態が生き生きして、建築に例えるならば建設途中と解体途中である。建設完了したらそれは死んでしまう」というようなことを言っていますが、その文脈と少し似ていると思います。だから違和感というのはまさに本能的に感じるもので、建築が生まれようとしている名前が付けられていない状態や、解体されている状態のこと。やはり「考える美」と「本能的な美」は切り分けられなくて、表裏一体なものなのかもしれません。

「強」の捉え方

関本●一方「強」は単純に考えたら構造強度のことをイメージしますが、一方で強いのに儂い、儂いものは美しいみたいなこともあるかもしれません。皆さんはご自身の建築におい

て「強」というものをどのように捉えておられますか。

小山●例えば、「神田テラスビル」という建物は、テラスの先端に当初柱があったのですが、浮遊感を出すために柱をなくしました。構造的には少し不安定に見えるけれど成り立っているところを面白いと思ってつくっています。それは非強の「強」とは違いますが、「強」がどこかで成り立っているけれどすぐに判断できない、その状態も多分違和感かもしれません。

古澤●ジェンダーの時代にこういうことを言うのはいけないのかもしれませんが、女性の強さみたいなことを言うこともありますし、建築の文脈で言えば、剛性より靱性の方が強いと見ることもできます。もっと究極に言えば、生命体そのものがやはり強いと思うんです。“エントロピー増大の法則”では、世界の全てものは崩壊に向かっていとされています。そのときに我々の体の中は、このエントロピーの増大に対して、細胞を入れ替えて自己崩壊しながら適応している、ものすごく強いシステムです。エントロピー増大に抗うのではなくて受け入れているわけです。そんな両義的な強さが建築でできたらものすごく興奮します。

だから僕はコンクリート造を好んでいます。コンクリートは現場に届くときは液体です。その液体が一瞬にして固まる両義的な振る舞いが面白くて。なおかつそれが崩壊していくときに、多分美しさをまとうと思うんですよね。

佐久間●古澤さん是对立するものを同時に並列で1つの建築の上に載せるために、とても複雑化されていますよね。今エントロピーの話をされましたが、それは対概念というものと何か繋がるのでしょうか。

古澤●価値をどこかの側面に同一化することにもものすごく抵抗があります。だから結果的に複雑というか、いろんな要素を重ねていくことになっています。でもおそらくそれは皆さんやっていることだと思うのです。あるものの価値を1つの側面に特定してしまうと、その価値にそぐわないものは意味がないという世界になってしまうので、だから相反する価値を輻輳していく。そうすることによって存在しているものが肯定される。そのようなイメージだから多分複雑になるのだと思います。

価値を1つの側面に特定してしまう世界は貧しいですよ。人間だって、自己肯定感が高いときと低いとき、すごく乱暴なときと優しいとき、情緒的なときと冷たいときなどが合わさっていてぐちゃぐちゃではないですか。だからお互い好きになるのだと思います。

関本●両義的な「古澤邸」のファサードもそれを物語っている感じがしますが、「強」というところにあえて寄せるならば、何が支えて何が支えられてるのか、力の流れ方が分からないですよ。構造家の山田憲明さんがおっしゃっていたのですが、ショーケースの中の食玩で、スパゲティナポリタンに刺さっているフォークが宙に浮かんでいるものがありますよね。本来スパゲティはフォークで吊り上げて食べますが、食玩は下から支える。これをスパゲティパラドックスと言うそうです。「古澤邸」は何かそういうものを感じるのです。果たし

てこのスラブは下から支えられてるのか上から吊られているのか、そんなことどっちでもいいじゃないかみたいなことを言っているようでもあります。

小山●逆さにしても成立しそうですもんね。

古澤●スパゲティパラドックス、初めて聞きました。面白いですね。確かにこれはひっくり返しても成立しますし、実際に僕は上下を反転させて設計したりもします。ちなみにスパゲティパラドックスというのを空間で体験したのは菊竹清訓の「東光園」です。強烈なる違和感だったのですが、いい建築だなと思った理由が分かりました。

関本●松岡さんたちの「裏庭の家」は階段を組んでいくうちにどンドンねじ曲がるのを直しながら建てていったそうですが、全部組み上がってみると力が分散し合って成立するようなところがあつたのではないのでしょうか。

田村●階段室には梁が通らないのでその部分は弱いのですが、実際物理的には階段が梁の代わりになって効いています。スパゲティの話じゃないですけど、構造に見えていないものが構造的な役割を担っています。

関本●消えていく「用」という表現をされていましたが、消えていく「強」みたいなこともあるのかもしれないね。

小山●合理的じゃない構造に魅力を感じているという部分もあると思います。例えば、サンティアゴ・カラトラバの建築は美しいと思うけれど、自分でそれを設計したいかという正直そうではありません。構造設計者が美しいと感じるものとの価値観のずれを感じることもあって、こうした方が合理的と言われても、なんか面白くないと思うことはあります。

建築家にとって「強・用・美」とは

佐久間●皆さんのお話を聞いて、「強・用・美」は解釈もいろいろあり、すごく拡張されているように思いました。「強・用・美」の有効性は今後も広がり、進化すると思われませんか。

小山●「強・用・美」は今後も建築をつくる上で、ベースロジックとなるものではないのでしょうか。そこからそれをどのように展開させるかという話が今日これだけできたので、僕は可能性を感じました。「美」については人と話すのは難しいイメージがありましたが、今日皆さんと「強」や「用」と同等のポテンシャルで話ができたのがとても新鮮でした。

古澤●果たして進化したのでしょうか。僕は進化って何だろうと思ってしまいました。

「強・用・美」はよく構造・機能・形態と言い換えられますが、もとは1つの言葉でした。松岡さんたちも書かれています、ルイス・サリヴァンの「形態は機能に従う」という言葉はすごく誤解されていて、この機能は必然性を意味している有機的メタファーです。一方で、形態はフォームのことで、形ではなく形式なんです。構造も形式ですから、形態も構造も機能もすべてフォームと言える。一緒になっているものが分解されて議論されるようになった背景は、完全なる科学主義によるものです。科学とはサイエンスで、分割して観察すること。でも僕は科学主義はもう限界に来ていると思っています。

科学主義は人間の理性の暴走であって、人間中心主義の最たるものですから。そして一番危険なのは理性ですからね。理性が問題なのは戦争を起こすということです。戦争は自国の利益の最大化という超理性体ですから。理性が暴走すると戦争が起きる。今まさに人間中心主義の、科学主義の、理性主義があるから世界がこういうことになっている。だからそれを戻さないといけません。でも懐古に戻すと懐古主義になってしまうので、そうではなくて過去の非理性を認めてくれた時代をきちんと重要視するという意味で進化だと思うのです。

つまり、「強・用・美」はサイエンス的に分解しないことによって進化すると思います。

関本●そういう意味で、始めに執筆を依頼させていただいたときに「強」だけを書くことをためらわれたんですね。松岡さんは「強・用・美」の今後についていかがでしょう。

松岡●私は「強・用・美」の全てに関わっているのは不確定性だと思っています。「用」の場合は、設計者の意図と実際使われるものには不確定な関係があります。「美」に関しても、美しいものをつくりませんが、それを決してみんなが美しいと感じるわけではなくて、それぞれ感じ方は異なるし、それを形容する言葉とともにやってきたり、時差とともに届く不確定なものであることを理解せざるを得ません。「強」に関しては、古澤さんの両義性も不確定性というか、そこに見えないものがあるというところを言われていて、伊藤さんも「強」は持続性を含めて計算では定義できないものになっていると言っている。

我々設計士としては、「強・用・美」の不確定な状況を受け入れて、そのまま設計していくのだと思います。自分たちがやりたいことも不確定性を含んでいて、状況と意図がともに進化していくべきなのではないのでしょうか。そういう意味での進化なのかなと思っています。

田村●僕は「美」は立面図で、「用」は平面図、「強」は断面図としての捉え方だと思いました。

古澤●なるほど、面白いですね。見かけ上は分かれているけれど、意味するのはひとつの建物だと。

田村●建築に向かう語り口の違いだと思います。不確定要素という話がありましたが、一方で建築はあらかじめ計画をしないではいけません。どれくらい射程の広い状態を保って設計することができるのかなのだと思います。

建築の強さや美しさ、またはこれ使えるなって思う瞬間は、アイデアをいろいろつくってカタチにして、オプションをいくつも比較するなかで、形は変わっても案の骨格は変わらない瞬間だと思うんです。形が動いても案が動かなくなる瞬間。その瞬間が建築がそこになじみ、強度を持ち始める時なのだと思います。

関本●本日は「強・用・美」という難しいテーマを解きほぐしながらお話いただきました。非常に面白く有意義な時間でした。どうもありがとうございました。

(2024年1月12日 JIA 館1階建築家クラブにて収録)

フェアウッドで未来を変える



佐藤岳利事務所
(元ワイス・ワイス)
佐藤岳利

かつて1円でも安く買うことが賢い消費と言われた時代がありました。今、時代は変わり、自分の購買行動が社会に環境にどのような影響を与えるのか、想像することが本当の賢い消費なのだと思います。

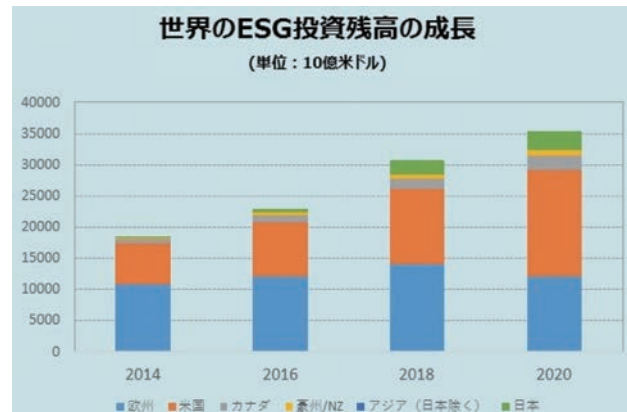
パームオイルを作るためにものすごいスピードでジャングルを切り開いたために、熱帯雨林が消滅してオランウータンが絶滅の危機に瀕しています。日本にはそれら地域から大量の木材が輸入されています。一方で、FSCなど認証を得た熱帯雨林由来のサステナブルな木材もあります。どこから来たものなのか、どのようにつくられたのか、そしてその場所は今どうなっているのか。興味を持って履歴や背景を知ることが重要なのです。

違法伐採のリスクがある木を安く買うよりも、少々高くても森林認証や再造林に取り組んでいる事業者や団体を応援する。

自分のお父さん、お母さんが、そして自分が働いている会社の社長がそのような考えで行動したら、お子さんや、その会社に勤めている社員たちは誇りを持つのではないのでしょうか？ そして家庭は幸せに、会社はいい雰囲気になり、社会は良い循環を生み出すことになると思うのです。

広告大手の電通が2022年4月に公表した「第5回SDGsに関する生活者調査」の結果によると、SDGsの認知率は86.0%で、2021年1月の前回調査から30ポイント以上も伸びました。^(注1) また、世界のESG投資残高を集計しているGSIA (Global Sustainable Investment Alliance) によれば、2020年の世界のESG投資総額は全体で35兆3千億ドルに達し、全運用資産98兆4千億ドルの35.9%、つまり全運用資産の3割以上がESG投資の分類に該当するそうです。^(注3)

企業にとって環境配慮の取り組みの重要性が増し、投資家はESGに対する取り組み度合いを見て、投資先企業を選ぶようになりました。ESG評価の低い企業は、投資対象からは外されることから、企業はもはやSDGs、ESGを無視することができなくなったのです。しかし、これからは投資を引き上げられるからという後ろ向きな姿勢ではなく、むしろ自らの意思で積極的にSDGs、



出所：GSIA Global Sustainable Investment Alliance (注4)

ESGに取り組み、未来を変えていくことが求められています。

以下、ワイス・ワイスの事例の中から、代表的な未来型の企業をご紹介します。

パタゴニアの事例

パタゴニアはアウトドアスポーツ用品の製造販売を手掛けるアメリカのメーカーです。パタゴニアにとってストアは「近隣への贈り物」とのことです。ストアがある地域の歴史や文化、景観を尊重し、ストアごとにしっかりと個性を持たせ、「この地域に、パタゴニアがあってよかった」と地元の方々に心から思っただけのストアづくりを目指しています。

日本のストアでは「NOW MORE THAN EVER」というコンセプトを掲げ、ストアづくりにおいて独自の建築の理念に沿って、竹材や古材、認証材などを徹底して使用してきました。

ワイス・ワイスは、パタゴニア横浜・関内ストアのリニューアルに際し、同じ神奈川県内の小田原市の事業者をお繋ぎし、ケヤキの木を使ったお店づくりを通じて、関係づくりのお手伝いをさせていただきました。これまで以上にパタゴニアが「近隣への贈り物」になれるように、可能な限りその地域の自然の材料を使用してリニューアルを実行させていただきました。海外の森林破

壊を抑制し、劣化した日本の木材産地と直接対話することで、国産材の持つ価値を高め森林文化を繋ぐことに献身するというお考えに基づくプロジェクトです。



バタゴニア関内ストア

スターバックス コーヒー ジャパンの事例

“人・社会”“地球”“コミュニティ”の3つを大切に活動をお客様やパートナー（従業員）など、関わるすべての人たちとともに、実践し続けているスターバックス。その中のひとつに木材を活用した店舗づくりがあります。

例えば大阪・梅田の「スターバックス コーヒー LINKS UMEMEDA 2階店」は、存在感ある「おおさか河内材」の丸太柱や魅力的な木々をふんだんに使った店舗デザインが特徴です。日本の豊かな森の恵みを活用し、環境負荷軽減や資源循環に寄与する。それだけではなく、それぞれの地域の森の木々を使うことで、「人と人」「自然と人」を繋ぎ、地元への誇りや愛着を育む。木を使って空間をデザインする知恵や工夫、全国に広がる木材調達ネットワーク、そして日本の森への深い思いが詰まったプロジェクトです。



スターバックス コーヒー LINKS UMEMEDA 2階店

ドリーム・アーツの事例

広島の新しいランドマークである「おりづるタワー」。この6階に、ドリーム・アーツの新しい本社オフィスを“オール広島”で新設する。木材だけではなく、他の素材も、伝統技術も、すべて広島のものを使って空間をつくり出すというチャレンジです。

広島県産木材調達のネットワークに加え、内装に使え

る広島の素材、伝統工芸などを広島県庁のアドバイスもいただきながら地道に研究・選別することからスタート。広島の木、広島の畳、広島の和紙、広島の織物。広島の魅力ある素材、技を集結させて空間づくりを開始しました。ものづくりの現場や素材の生産現場に山本孝昭社長をはじめドリーム・アーツの社員の皆さんも一緒に訪れ、自分の目で見て、耳で聞いて、心に触れる。つくっている人に会うことで、素材やものに「命」が宿りました。



ドリーム・アーツ 広島おりづるタワーオフィス(注5)

「フェアウッドを、常識に」。

二宮金次郎(尊徳)の言葉で「遠くをはかるものは富み、近くをはかるものは貧す」というものがあります。富めるもの、成功するものは目先の損得ではなく、将来の豊かさのためにさまざまな準備をしている。一方、窮するものは、目先の損得で物事をはかるため、一時的には運よく成功が得られたとしても、継続することはない。ほぼすべての森に携わる人たちが共通して持っている思想ではないかと思えます。

林業家は100年スパンで物事を考えています。今日植えた苗がお金になるのは、子どもの代、孫の代まで待たなければなりません。また、今日お金にできた木は、祖父あるいは曾祖父の仕事のおかげです。現代人とは全くちがう時間軸で生きているのです。この産業はみんなで支えていかなければならないと思えます。

「フェアウッドを、常識に」。暮らしや仕事を通じて、自然環境、地域社会、そして未来の世界を豊かにすることができるとのことです。

ひとり一人が意識し、行動すれば、あっという間に世界は変わるのだと私は信じています。

〈注〉

- 1: 出典：<https://the-owner.jp/archives/11276>
- 2: ESGとは、Environmental (環境)、Social (社会)、Governance (ガバナンス/企業統治)の3つの頭文字を組み合わせた言葉。これらを考慮した投資活動や経営・事業活動を指す。
- 3: 出典：<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=39388>
- 4: 出典：<https://www.gsi-alliance.org/wp-content/uploads/2021/08/GSIR-20201.pdf>
- 5: 椅子デザイン (南榎本文夫アトリエ 榎本文夫)

中東の時代変化と新しい建築



日本製鉄
知見徹摩

私は建築家ではありませんが、チタンという新しい建築素材を抱え世界を飛び回っている立場として、未来に向かって激動している中東の建築について個人的な見解をレポートさせていただきます。

建築用チタン素材

チタンが建築に初めて使われたのは、1973年大分県はやすみめの早吸姫神社の屋根でした。わずか50年前のことです。歴史は浅いものの、意匠性と高耐久性を兼ね備えた建築材料として、海浜地区等の厳しい腐食環境から恒久建築物(博物館、美術館、神社仏閣等)へと普及してきました。国内各地の博物館や美術館、日本の伝統建築である寺や神社の屋根などに採用されています。また、土木分野では、港や空港滑走路の棧橋などに使われています。

建築用チタン素材は海外でも多くの実績を持ち、フランク・ゲーリーなどの著名な建築家に採用されています。パリ郊外の再開発地区では、エドワード・フランソワが既存の規定にとらわれない新しいパリを表現する建築として、外壁に日本の苔をオマージュしたクリスタル仕上げの建築用チタン素材を使い、レジデンシャルタワー M6B2 Tower of Biodiversityを設計しています。

錆びずに、軽くて、丈夫なチタンは未来に向かって変化している地域にフィットすると考え、現在は新しい時代を切り開いている中東への貢献機会を探るため、私も年に2回ほど中東を訪問し、現地の設計会社や建築部材加工業者、施工会社、および、時には市政府などを回り未来の街づくりについて協議しています。



ホテル・マルケス・デ・リスカル (設計: フランク・ゲーリー、スペイン、2004)
©THE HOTEL MARQUES DE RISCAL

ドバイという街

豪華絢爛を地で行くドバイを有する中東外交の中心国の1つであるアラブ首長国連邦は、人口996万人(2022年推計、出所: IMF)で、首都はアブダビ、アラビア語が母国語ですが普通に英語が使えます。宗教はイスラム教が重んじられ、至る所に礼拝所が設けられています。



ブルジュハリファ122階(高さ442m)のレストランから見た開発区

初めてドバイの地に降り立った時、民族衣装をまとったエミラティ(UAEの人々)を見て「全然違う世界に来たな～」と思った記憶があります。ラマダン(日中の飲食を絶つイスラム五行の1つ)の時期でも、我々日本人が昼食を取れる場所が多く、普通に生活できます。過去に同じイスラム圏であるマレーシアで苦労した経験があり、それなりの覚悟で臨みましたが嬉しい肩透かしにありました。また、イスラム国家では基本的にお酒は禁止されていますが、観光都市ドバイではドバイ政府が定めたルールを厳守することを条件として飲酒が可能になっています。厳しい交渉が続く出張での晩酌は活力を保つための重要な儀式。ただしグラスビールやグラスワインは1杯2,000円!! 全体的に物価が高いので、アルコール飲料があるだけでも有難いです。

現地に馴染める方は、ローカルフードに挑戦するのも良いでしょう。私のお気に入りのレストランでは、つい立てで囲われたスペースの床に座ると店員がビニールシートを真ん中に敷き、お通しの生野菜を置いていきます。ヨーグルトを飲みながら待っていると、大皿一面に敷き詰められた米の上にドーンと大きな肉が横たわっているマンディの登場です。エミラティに「手で食べるのが常識」と言われ見様見真似で食べましたが、店を出る時に見た他の席では皆スプーンを使っていました……。

1人当たりの名目GDPは世界16位(2022年、51,306USD、参考: 日本 33,822USD 世界30位)と豊かな国です。首都アブダビおよび周辺諸国は石油産業に依存してしまし



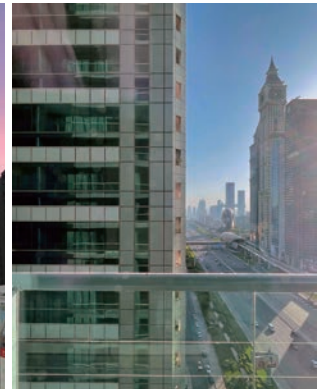
ドバイフレーム



未来博物館、建設中の様子



ドバイ市中心部



ホテルの窓から見た主要道路とドバイメトロ(地下は走りません)

だが、ドバイは政治的安定性、地理的優位性のほか、石油資源の枯渇を見越し、経済の多角化を進めてきた政府の先駆的な産業政策が奏功し、投資・観光で経済成長を続けています。

ドバイの人口は2008年から2018年までの10年間で約165万人から約320万人と倍に近い増加率を記録しており、建設ラッシュが始まりました。2021年にはCOVID19の影響で1年遅れてドバイ万博が開幕。駅や新しい施設の建設需要が起きました。足元も開発中のプロジェクトは複数動いていて、主要プロジェクトだけでもドバイ・アイランド、ザ・ワールド・アイランド、ドバイ・クリーク・ハーバー、ドバイ・マリタイム・シティ、ドバイサウス・パーム・ジュベル・アリなどがあります。ドバイ・クリーク・ハーバーには、高さ1,345mのクリークタワーが建設される計画が進んでおり、高さ828mのブルジュハリファを抜き世界一になる予定です。

生まれ変わる中東の主要都市

建設ラッシュと時を同じくして観光地化が進むドバイにて、象徴的な建築物が数多く建設されています。代表的な建築物としては、7つ星ホテルと呼ばれるブルジュ・アル・アラブ (Tom Wright 1999年)、ギネス記録にも認定された世界最大の水槽があるドバイ水族館を有するドバイモール (DP Architects Pte Ltd. 2008年)、現在世界一の高さを誇るブルジュハリファ (Adrian D. Smith 2010年)、世界最大の額縁と称されるドバイフレーム (Fernando Donis 2018年)、世界でもっとも美しいと呼ばれる未来博物館 (Killa Design 2022年) などです。ドバイフレームと未来博物館は、沿岸部に立地する建築物として外装材には耐食性が高いチタンも候補に上がったプロジェクトでした。

この流れは、石油を主要産業とするアブダビにも影響を与えていて、従来は歴史的建造物が多い印象だったところに、ジャン・ヌーヴェル設計によるルーブル美術館 (2017年) が開館しています。周辺諸国でも、クウェートでは214,000㎡の巨大商業施設シェイク・ジャベール・

アルアフマド・カルチャーセンター (SSH 2016年) がクウェート湾沿いに開業。これは世界最大のチタン外装を持つ建築物で、使用されたチタン素材は250トン以上にもなります。世界のチタン総生産量が16万トンレベルでしたので、航空機向け需要を含む全世界の約0.2%ものチタンがこの一大プロジェクトに費やされたことになります。

サウジアラビアでも巨大プロジェクト「NEOM」が着工しています。ネオムは、サウジアラビアの温暖な西北部に位置し、沿岸リゾート、沿岸部産業都市、長さ170kmの人工都市、山岳リゾートの開発が始まっています。人工都市は、高さ500m、幅200m、長さ170kmの直線高層都市で、高さ500m×幅200m×長さ800mを1つのモジュールとして建設していくプロジェクトです。2030年までの建設を計画、人口は90万人を想定し、高速鉄道により端から端まで20分で到達できます。幅200mの空間に人間が暮らす環境を整えます。工事には20万人のワーカーを動員する予定とのこと。まさに未



直線高層都市 THE LINE の建築現場

来を彷彿させるこの絵姿は、時を超えて価値を提供できるチタン素材が活躍できる場であると思っています。

未来へ繋げる

ネオムプロジェクトを始め、中東のプロジェクトは未来に繋がっていく可能性を秘めています。日本での日常生活から見ると、この常識外れの計画はまるで別の星での出来事を感じます。しかし、実際に現地に足を運び現場を見ると、言葉にするのが難しい感覚が湧き出てきます。現場・現実に向き合い、本質を見抜く訓練を積み重ねてきた経験が、プロジェクトに関わる人々の心を動かします。この地球上において未来を創る仕事に関わることができる喜びは、中東ならではのものと感じています。不可能を可能にするプロジェクトに、チタン素材を携えて挑戦していきます。

JIA建築家大会2023東海in常滑 まちづくりワークショップ企画

まち歩き 常滑の「たから」と「あら」 を考え提案をしよう！

—さまざまな「つながり」を作り、「環る」の創出へ—



建築まちづくり委員会
委員長
松村哲志

JIA建築家大会2023東海in常滑において、「まちづくりワークショップ企画「まち歩き 常滑の「たから」と「あら」を考え提案しよう！」が行われた。この企画の特徴は2つある。1つは、まちの主演である住民・市民・行政職員と建築家が大会の場で直接、協働して提案を行ったことにある。もう1点はJIAまちづくり会議・JIA建築まちづくり委員会と(一社)日本建築まちづくり適正支援機構(以下JCAABE)との共催によって行われた点にある。まちづくりは多面的な側面を持っており、さまざまなプレイヤー、専門家、団体と協働して取り組んでいくことが大切である。その意味からも委員会や会議、団体の枠組みを越えて協働することでその効果が大きくなっていくことが期待できる。ここでは11月9日に実施されたワークショップについて報告する。

常滑：歴史や景観を今につなぐまち

今回、まち歩きのテーマとなる常滑は、瀬戸や信楽と並び日本六古窯の1つと呼ばれ、窯業が盛んなまちである。西に伊勢湾を望み、海運にも恵まれた立地から、明治期以降には土管・タイルを全国に送り出していった歴史を持つ。まち歩きの対象となったエリアは、山の斜面を利用した登り窯やレンガ造りの煙突が立ち並ぶ旧市街地であり、伝統的な街並みが残っている。近年、旧市街地での製造業としての生産量は減少しているが、1972年頃からこの景観を楽しむ観光コース(やきものの散歩道)が自然発生的に現れ、現在では多くの観光客が訪れている。一方で、2005年に中部国際空港が開港した影響から常滑市全体では人口が増加、やきものの散歩道の玄関口である常滑駅周辺もそれに合わせて区画整理され新たな駅前空間へと変貌しつつある。今回のまち歩きは古い街並みが残るやきものの散歩道を中心にしながら、玄関口となる駅前新市街地も含めたエリアを対象として行った。

住民・市民との協働に向けて —繋がるための準備—

この企画の大きな特徴の1つは、まちの主演である住民・市民と建築家が協働することにある。対象となるエリアは景観や歴史、産業などの資源が数多く見られ、それを



まち歩き：「たから」「あら」を発見し記録していく



まち歩き：旧市街地の街並み



キックオフ・顔合わせ

観光資源として活用したまちづくりが一定程度の成果を上げている。このようなエリアでは特に住民・市民と協働する「参加のデザイン」は重要である。しかし、既存の街で住民・市民と協働することは心構えと手法、ファシリテーション技術が必要となってくるため、専門家である建築家であってもそのための学びや準備が必要である。

このイベントの実施に先駆けて、ファシリテーターとして参加する建築家に対して、動画教材を利用した学びの場を提供した。共催団体であるJCAABEは参加のまちづくりのノウハウがあることからまちづくりに関するファシリテーション技術学習教材を提供していただいた。まち歩きに参加する住民・市民の募集は大会実行委員会を通じて常滑市役所と繋がり行った。ボランティアでまちの観光ガイドを務める方や観光協会の方、行政職員など多くの普段からまちづくりに携わる人が集まった。これは大会実行委員会、JIA東海支部の方々の日々の活動の賜物である。これこそJIAの強みであると改めて感謝し、その可能性を大きく感じた。

実施3週間前にはJIAまちづくり会議、松島逸人議長と常滑を訪れ、行政の方への説明、打ち合わせと事前の下見を行い、モデルコースを作成した。まち歩きを行った際に同じルートばかりにならないようにするためである。今回、名古屋女子大学家政学部生活環境学科学生11名が運営協力として参加した。地元の若者が参加することは活気とつながりを創出する上で有効な手段の1つである。



グループワーク：分析図の作成



グループワーク：提案図の作成



発表と共有：皆で協力して行う

まちづくりワークショップ常滑の「たから」と「あら」

ワークショップは前半のまち歩きと後半のグループワークで構成されている。出発地点に集合し、キックオフミーティングを行った。キックオフミーティングはワークショップの意義や目的を理解してもらうために大切である。グループは住民・市民・行政職員と建築家、地元学生がほぼ均等になるように構成、まち歩きから提案まで同じグループで行う。ここで重要なことは「楽しい」雰囲気をつくることである。「まちには明るい未来がある！」ことは楽しむことから始まる。

ファシリテーターを中心に繋がりを楽しみながら笑顔でまち歩きへと出発。事前に選定したコースを皆でめぐりながら進行していく。目的地はグループワークが行われる市民会館である。「たから」(良い点)、「あら」(課題)を発見し、ポインターと呼ばれる指し棒でわかりやすく示し写真を撮影、記録していく。撮影場所とともにコメントなどもマップに記録しておく。もれなく記録できるように役割分担を行うが、適度に交代しながら行うことで皆が関わられることを心がける。皆が関わることが「まちづくり」が自らのものになっていくために大切である。魅力的なものが見えたらコースから外れても構わない。発見の自由さを保ちながら目的地に辿り着くようにファシリテーターは「ゆるく」共に歩いていく。いい意味での「ゆるさ」はまちづくりにおいて重要である。

たくさんの発見をしながら各グループが市民会館へと到着した。到着した班から分析と提案を開始。写真をマップに貼り付け現状の分析を進めていく。分析ができてきたら「たから」を活かす、「あら」を改善する提案をまとめる。建築家はイメージを形にするスペシャリストであるので話し合いをスケッチなどで形にしていく。この時ファシリテーターは見えない声を引き出しながら「てんこ盛り」にしてくように心がける。ここでも重要なことは「ゆるさ」と「楽しさ」である。緩やかに、しなやかに、楽しくまとまった5つの提案と分析ができ上がった。

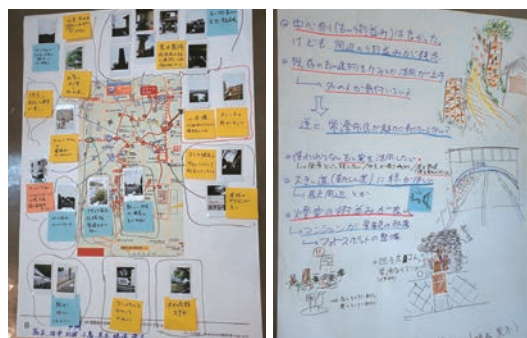
発表・共有 —未来へつなげる—

各グループででき上がった分析と提案を発表し、共有する。住民・市民・行政・建築家・学生など入り混じっ

て発表を行い、共有していくことは未来へ繋がっていくことの重要な1つである。

「やきもの工場の空き家をカフェで活用する案」「常滑焼きを塀などに活用する案」「煙突や工場の伝統的な景観を活かしていきたい」「新市街地にもこの景観を活かしたい」という意見など、さまざまな提案が行われた。あるグループでは落書きが「あら」であると捉え、別のチームではウォールペイントと捉えて「たから」であると考える正反対の意見も出された。これこそがまちづくりである。多様な意見があり、多様な見方がある。それを許容しつつ皆で話し合い緩やかに束ねていく。まちづくりの基本であり、第一歩である。私たち建築家はそこに共にあり、良い方向へと向かっていくための良き伴走者でもあることが大切である。

発表が終わり常滑市副市長から挨拶をいただき、成果物を贈呈した。後日、贈呈された成果物を今後のまちづくりの資料として活用することが参加されていた行政職員から連絡され、住民・市民、行政、建築家(全国、東海支部)、地元学生などさまざまな「つなぐ」が創出されたイベントとなった。この「つなぐ」が集まることで今回の大会テーマである「環る」が生まれたといえよう。この企画をきっかけに常滑とJIAとのさらなるまちづくり協力に向けた一歩になってくれることが期待される。



成果物
左：分析例
右：提案例



参加者全員で記念撮影

建築家大会 プレウィーク シンポジウム

「資格制度のこれから」を終えて



関東甲信越支部
常任幹事
安川 智

全国大会2023東海in常滑のプレイベントとして、10月16日に建築家クラブに5名の登壇者を迎えて、「資格制度のこれから」を考える」オンラインシンポジウムが行われた。詳細は『JIA MAGAZINE』421、422号に掲載予定のため、本誌では率直な感想と見えてきた課題、そして今後の取り組みについて考えてみたい。

(司会：慶野正司 (JIA 副会長)、登壇者：下写真5名)



佐藤尚巳 JIA 会長 佐藤尚巳建築研究所	上垣内伸一 JIA 関東甲信越支部 2022 年度本部理事 および関東甲信越 支部副支部長 ウエガイト建築設 計事務所	黒木正郎 JIA 関東甲信越支部 東京建築士会副会長 日本郵政施設部首席 建築家	水越英一郎 JIA 関東甲信越支部 2023 年度関東甲信 越支部常任幹事 山下設計	南 知之 職能・資格制度委員 会委員長 石本建築事務所
-----------------------------	---	--	--	--------------------------------------

基本的スタンスは同じながら資格制度への見解は相違

冒頭に佐藤尚巳会長より、近江商人の「三方よし」の精神のように、顧客に加えて社会のことを考えるのが建築家であるとの発言があり、登壇者全員がその意見に賛同した上で議論はスタートした。

長年、登録建築家制度に関わられた南知之氏と上垣内伸一氏は、制度を確立できないジレンマに触れ、南氏からは過去の取り組みを継承する必要性を、一方で上垣内氏からは理事懇談会案の作成を機に、当初の登録建築家制度の中身も変化していく必要性を問う発言があった。

資格制度について自ら新参者と紹介した水越英一郎氏は、過去の経緯を重視し過ぎることで制度改革の目的や目標が不明瞭になるのではとの懸念を示された。

また、東京建築士会副会長である黒木正郎氏は、今回

の発言はあくまでJIAの一会員とした上で、資格制度は建築家や建築士の自己満足ではなく、むしろ社会が必要とする資格かどうかを問われていた。

5つのテーマの議論における主な相違点

1. なぜ資格制度についてこれだけ議論しているのか？
2. なぜ登録建築家の制度は行き詰ってきたのか？
3. 理事懇談会のまとめ案「①+②」をどう思うか？
4. 理事懇談会のまとめ案はどのような課題があるか？
5. JIA会員の総意としてこの改革を進めるにはどうするか？

議論を通して、登壇者コメントと参加者アンケートに同じ傾向を見ることができた。制度改革を進めることは賛成、ただし各論は賛成／反対／別意見があり、新制度実現の難しさと議論の整理に時間が必要と実感した。

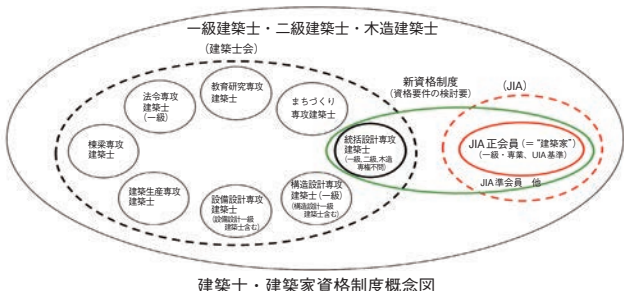
誰のための何のための資格制度の見直しか？

- JIA (登録建築家) と建築士会 (専攻建築士) の登録数が減少している。資格制度が社会に対してわかりにくい、会員にとってメリットがないと続かない。
- JIAと士会が各々の資格制度を有しており、JIAは一級建築士かつ専業を条件としているのに対して、士会は兼業であるゼネコンの方、一級、二級、木造建築士の方も対象としている。

上記2点は、議題1と2の説明である。理事懇談会のまとめゆえ、会員数の減少は積年の課題であろう。しかし、制度改革は会員数の減少が理由なのか？ JIAと士会の二世統合がありきか？と改めて疑問を感じた。クライアントや社会のニーズや利益を一番に考えて取り組むべきであり、JIAや士会の会員のことが先んじてはいけな。単に説明の順番が違うだけでは？という方もいるが、誰のための、何のための資格制度の見直しかを改めて考える必要があると感じた。

社会やクライアントは設計者に何を求めているか？

2005年の耐震偽装問題を経て、2008年に構造一級建築士の資格が創設された。人命に関わる建築物の安全性および構造設計に対して、信頼性を求める声の高まりによるものであり、同時に設備設計一級建築士の資格が制度化された。建築士は知識・経験・技術に加えて、倫理性や道徳性も有すると思っていた当たり前のことが、耐震偽装問題によって、ニーズとして顕在化したことに他



ならない。

構造一級と設備一級が新たに制定される際に、統括建築士の制度化も議論され、結果として見送られたと伺ったことがある。不正不当事項が発生し社会的な問題になって初めて制度見直しが行われる、どうしてもそのような印象を持ってしまう。

現在の建築士数は117万人（一級37万、二級78万、木造2万（令和3年4月1日時点））であり、欧米諸国の建築家と単純な比較はできないにしても圧倒的多数である。これは基本的に生涯資格であること、構造・設備エンジニア、施工技術者等の建築設計を主たる業務としていない人が多数含まれていることがあげられる。

本来クライアントに最も近い立場で、設計を統括する経験や能力を有する人を探すにあたり、多数の建築士の中から、構造一級や設備一級、施工管理技士や積算士でもなく、監理を主たる業務としない人を探し出すことになる。もちろん、会社や個人のホームページやブログ、名刺に記載すれば判別はできるが、フェイクニュースがはびこる現代社会において、その信憑性には甚だ疑問が残る。各所属団体が任意に表示・認証する制度はあれど、組織を越えて認定されたものは建築士以外にない。専門化・複雑化し、今後も増えうる設計者の役割を細分化し表示することは限界がある。むしろ、クライアントや社会のニーズを理解して、安全で機能的かつ質の高い建築物を実現するために、経験や能力を有する人を、組織の壁を越えて認定することができないか。この人に頼めばそのような建築を実現できることを担保することは、社会的な利益に繋がるはずである。

制度改革の論点①（専業／兼業問題）

約100年前に西洋の建築技術と建築家制度を導入しようとし、その後数十年にも及ぶ議論の結果、設計施工業務を行うゼネコンの大反対を受け、建築士資格は専業／兼業を問わず、設計と監理業務を包含した制度として位置づけられた。

我が国の建築士制度の歴史を振り返り、社会的に生じた問題に、専業／兼業による差異はあったのか？むしろ設計施工分離を基本としていた公共工事において、DB（デザインビルド）やPFI等の設計施工会社単体や設計会社と施工会社のJV、さらには事業者やデザイナー・アキテクトとの協働企業体等、多様な発注形態が誕生している。

官民を問わず発注者は設計者の実績を評価し、プロポーザルやコンペの提案やヒアリングを介して、設計者の資質と能力を判断することができる。利益相反になるリスクを理解した上で、発注形態を選択することはクライアントの自由であり、利益相反を繰り返すような会社や設計者は当然淘汰される。我が国の資格制度の歴史的

な背景と社会の流れを十分に汲み、専業／兼業の枠を越えて、優秀な設計者を認定する方がより重要であり、幅広い選択肢から社会やクライアントに選ばれる建築士・建築家を目指すべきだと思う。

制度改革の論点②（設計者の資質）

現在、JIAは登録建築家を認証制度、士会は専攻建築士（統括設計専攻建築士）を表示制度として個別に認定している状態である。過去にこの資格の同等性があるのみなし、統合化する動きがあったが、耐震偽装事件を経て、前述した構造・設備一級の国家資格や、改正建築士法や改正建築基準法へと向かう。改めて資格制度に対する潜在的なニーズがあるとすれば、第三者的に評価された設計者の資質であって、すでに制度で業務範囲を限定された建物の規模や構造（一級／二級／木造）ではない。理事懇談会のまとめ案が示す統括する能力に対して、関係団体の相互理解が得られたときに、社会的なニーズに本当に応えることができると考える。

見えてきた課題と今後の取り組みについて

1) 資格制度資料のアーカイブ化

今回の5名の登壇者やアンケートに見られた意見の相違は、会員全体の縮図とも言える。意見の相違の要因の1つは資格制度に関する情報格差ではないかと思う。過去の議論において集めた資料をアーカイブ化し会員に公開し、基本的な共通知識を持った上で前向きな議論をすることが重要である。もちろん、過去の議論や資料を調べることが全てではなく、理解した上で次の時代を見据えた議論を行うことが肝要である。

2) 個人・組織・業界横断的な社会へのアピール

佐藤会長が掲げるJIAの「頼りになる建築家」をアピールするために、ホームページ刷新やSNS活用など、すでに新たな取り組みが始まっている。組織の垣根を越えて、業界全体としてさらにアピールする機会を増やすことが重要であろう。個人的な活動としては登録建築家や専攻建築士の資格を名刺に印字することで、日常的に社会にその存在を知ってもらい、今後の活動に繋げることも小さな一歩だと思う。

3) 歴代会長時代の取り組みのヒアリング

歴代会長時代に取り組みされた先輩方からお話を伺うことができた。創設時に掲げた資格制度に関する思い、時代の変遷とともに、次の時代にどのような制度が必要かを考える機会に繋げていければと思う。その中で会長経験者の方からいただいた言葉が心に残っており、最後にその言葉をご紹介します。

「建築家とは所属を指すものではなく、人を指すものであること。その志を共にする人々の集合体が日本の建築を良くする。その組織がJIAである。」

当事者に聞く 審査から設計レビュー

— 設計者／発注者支援者 座談会 後編 —



2018年「JIA建築家大会2018東京」のメインイベントとして企画された、実施コンペ「大井町駅前パブリックスペース設計コンペティション」。このコンペに関わった方々にコンペ実施の裏側を振り返っていただき、4回にわたりお届けします。今号は前号に続き、最優秀賞に選ばれた設計者と、企画から設計支援を担ったJIA担当者、そして審査委員長の千葉学さんに、審査やこのコンペの特徴であるレビューのことを語っていただきます。

座談会

設計レビューの意義

参加者	川嶋貫介	設計者／川嶋貫介建築設計事務所、元・あかるい建築計画
	斎藤信吾	設計者／斎藤信吾建築設計事務所、元・あかるい建築計画
	根本友樹	設計者／早稲田大学、元・あかるい建築計画
	千葉学	審査委員長／東京大学教授、千葉学建築計画事務所
	藤沼傑	2016-2020年度 JIA関東甲信越支部長
	相坂研介	JIA建築家大会2018東京 大会実行委員会企画部会長／ JIA関東甲信越支部常任幹事 発注者支援WG
	田口知子	進行／広報委員会委員長



左から、相坂研介氏、千葉学氏、藤沼傑氏、田口知子広報委員長、根本友樹氏、斎藤信吾氏、川嶋貫介氏

(前号からのつづき)

田口 **広報** 今回のような設計レビューの付いたコンペはこれまでであったのでしょうか。

相坂 **JIA** JIAが企画に絡んだコンペはこれまでもありますが、そこにレビューがついたのはこの大井町のコンペが初めてです。JIAのレビューは、施主に安心してもらうのはもちろんですが、設計者に対しても竣工後に問題が出そうな箇所を先に伝えるので愛が感じられるわけです。欠陥建築を探すような意地悪なものではなく、デザイナー同士のレビューです。中立な立場を取りながら、設計者の意見もきちんと汲んで、翻訳する力のある人たちが行うのが特徴です。

田口 **広報** あとに続く事例はないのでしょうか。

藤沼 **JIA** 続いてほしいと思って始めたのですが……。

相坂 **JIA** JIA内でいろいろな支部がコンペを実施していますが、実績を何も共有せずに支部ごとに動いていたら全国組織である意味がありません。引き継いでもらうところは引き継いでもらいたいし、せつかく大井町でレビューをしたのでその仕組みは参考にしたり、受け継いでもらいたいです。

千葉 **JIA** レビューはきちんと行おうと思うと大変なんです。だからやはり制度を整えて、レビュアーへの報酬もきちんと決めていかないと続かないと思います。

田口 **広報** 大井町のレビューでは報酬は出たのでしょうか。

相坂 **JIA** はい。日当×日数でいただいています。

斎藤 **設計者** 今回緻密なレビューをしていただきましたが、それもレビュアーの皆さんのすごい労力になっていると想像します。ただ、レビューがあることによって、私たちのような実績がない若い設計者の設計機会を増やすことに繋がって

いると思うので、ぜひこの仕組みが広がっていくといいなと思います。

藤沼 **JIA** 組織事務所がつくる建物の品質が、ある程度維持されているのは設計レビューのフォーマットがあるからで、私は旧組織の中で設計レビューをよく担当していました。でも今回の千葉先生たちのレビューはそれとは相当違いました。組織事務所の中でレビューをすると最終的に一般解になる傾向がありますが、個々の建築家がレビュアーとして集まると、一般解に着地するのは異なる良い議論ができることがわかりました。

根本 **設計者** そういう意味では、今回品川区の担当の方はかなりコンペというものを尊重してくださっていた印象です。レビュー以外でも打ち合わせさせていただきましたが、その中でもやはりコンペで選ばれた案だから、コンペの案の良さを損なわないようにと気を遣っていただきました。それはJIAの皆さんの事前の調整や打ち合わせによるところが大きいと思います。

相坂 **JIA** 組織事務所の人とアトリエの人のハイブリッドでできている点もJIAのいいところだと思います。

藤沼 **JIA** 組織事務所もJIAの中にも自分たちの設計ノウハウを外に出して使わせるのは嫌だという意見があるのですが、僕は公的な資格をいただいて、仕事を独占してやっている建築士である以上は、公共に対する職業としての責任があると思っています。だからこそ、公共の安全を守るためのノウハウは、建築士の職能の中では共有すべきだと思うのです。

相坂 **JIA** レビュー項目などは誰かの専売特許ではなくて、

設計者が使える開かれたものですね。

あとは人件費なども含めて仕組みを整えれば、JIA内に担い手はいます。問題はそれを実施してくれる自治体との接点が少ないことでしょうか。

田口 広報 大井町のコンペは品川区と城南地域会の長い付き合いがあつてJIAの意図を汲んだコンペが実現しました。

相坂 JIA そういう繋がりも大事にしながら、もっと普遍化する、ネットワーク化する、あるいはシステム化するようなこともできるといいですね。

千葉 JIA いきなりシステムを作るのは僕は無理だと思います。設計レビューをいきなり普遍化するのは難しく、それを言い出したら日本の設計料の決め方や、レビューを行う人の位置づけなども課題です。ですから、やはり今回のコンペ・レビューで良かった点と、問題だった点をきちんと整理して、それを積み上げていくことでシステムを構築するのが現実的ではないでしょうか。

自治体とお付き合いをすると、思いのほか建築の設計や、コンペやプロポーザルの意味を理解されていないと感じることが多いです。そもそも、コンペで選んだ案を変えていいのか、建築家には何を任せて発注側はどんな責任があるのか、もちろん若手を選ぶことのリスクも含め、リアルにイメージできていません。だから何となく実績のある人に頼んだ方がいいということになってしまう。今回レビューを行った意味は、若手でも仕組みをきちんと作ればネガティブに捉えていたことも解決できるということの実践だったわけです。

田口 広報 少し話が変わってしまいましたが、2021年にこのトイレで犯罪事件が起きてしまいました。そのことで、入り口の位置などプランを疑問視する声も聞かれました。

藤沼 JIA 事件は残念ですが、入り口の位置などは設計レビューで防犯面についてかなり議論をして決めました。

根本 設計者 トイレの入り口は歩道側ではなく線路側にしています。線路側からは少し距離のある視線があります。

相坂 JIA これは上手な解決策で、線路にいる人から見られていることが犯罪抑止に効いていると私は思っています。だから入り口を線路側に向けているわけです。

田口 広報 線路側からは実際はそんなに見えないのでは。

川嶋 設計者 そのぼんやり見える程度の距離がちょうど良いと思っています。

根本 設計者 レビューや設計の打ち合わせの中で、扉の向きや配置についても指摘いただいて、こちらも提案してやり取りしました。品川区もそれをご存知だったので、事件があった後も、このトイレは設計段階で防犯面についてきちんと検討されていて、事件の内容と照らし合わせても事件が起きたのはトイレの構造のせいではないと判断していただきました。

相坂 JIA それは非常に嬉しいことですね。

根本 設計者 レビューがあつて、発注者と設計者と、その間に立ったJIAの皆さんで共通認識を持つことができたからだと思います。

藤沼 JIA 我々はレビューの報告書をきちんと品川区に提出しました。品川区も議会から質問があつてもここまでやっ

たという実績を堂々と見せられます。

田口 広報 レビューを取り入れる難しさはどういった点でしょうか。

千葉 JIA 建物の規模が大きくなると、設計自体がとても複雑になります。そうするとレビューも片手間にはできないと思います。だからすべてのコンペで同じ仕組みを使えるかという点も厳しいですね。それから、規模が大きくなった時に、それをレビューできる人がいるのかという問題もあります。いずれにしても、審査に関わった人がレビューを継承するのは最低限必要ですね。

相坂 JIA 建築家協会はベテラン会員が多く、組織事務所勤めだった方は定年を迎えて事務所を辞めるとアトリエを開く方も多い。その人たちには知見があつて、前職でレビューの経験があつたりします。そういう方にぜひレビューアになってほしいと考えたのが、この仕組みの狙いの1つです。自分でコンペをやってきた人たちですから、建築家の気持ちもよく理解しながらサポートできると思うのです。

藤沼 JIA でもレビューアも向いている人と向いていない人がいるんですね。自分の意見にこだわる方がレビューすると喧嘩になるだけなんですよ。

千葉 JIA そこは重要ですね。ダメ出しするだけではレビューではありませんから。

川嶋 設計者 今回の大井町駅前公衆便所では、審査員やレビューアの建築家の皆さんが私たちを後押しするという姿勢を示してくださったことが嬉しかったですし、勇気づけられました。だからこそ実現したプロジェクトだと考えています。

藤沼 JIA JIAは公共建築にはプロポーザルと言っている側面もありますが、やはりコンペがもう1つの選択肢としないと世の中つまらないし、若手も育ちません。大変だけど面白いコンペもあることが、もっと周知されるといいですね。

千葉 JIA 僕は、プロポーザルの大義名分と現実がすごく乖離している状態は、変わらないといけません。案を提示すると言われても、それなりに案を具体的に練らない限り、そこで求められていることや建築の方向性は見えてきません。やはり建築のデザインや空間をきちんと議論の土俵にのせる風土が形成されないと、社会の中での建築のデザインに対する価値や理解は深まらないのではないのでしょうか。だから僕はもっとコンペが増えていいと思っています。

根本 設計者 コンペは施主にとって不安要素が多いものかもしれませんが、今回のようにレビューという仕組みでそこを担保していただければ、コンペが成立するんですね。

相坂 JIA そうなのです。システム作りは一足飛びにはいかないでしょう。まずコンペに参加報酬を払う仕組みがありませんし、コンペ後の設計料の見直しも課題です。でも、JIAは建築の専門家集団として、若い世代の建築家をサポートし、社会にも貢献できる仕組みづくりを繋げていきたいです。

田口 広報 設計レビューの価値、そして透明性を持って共有することの重要性を改めて感じました。今日はありがとうございました。

(2023年10月10日 JIA 建築家会館にて収録)

法令違反の建築物の 設計に関する責任について



山崎哲法律事務所
弁護士
安藤 亮

「検査済証が取れなくてもいいから」や、「責任は全部自分が持つから」などと言って、建築基準法等の法令に違反する建物の設計あるいは施工をしてほしい、と依頼されたことはありませんか。私は、建ぺい率・容積率違反の建物の設計をした等、法令違反の設計に起因して設計の瑕疵、あるいは監理義務違反の責任を問われた案件を複数扱ったことがあります。皆様はこのような依頼を受けないと思いますが、仮に依頼を受けた場合にどのような結末になるのか、説明していきたいと思います。

法令違反の設計を行った場合の法律関係

施主は、通常、法規に違反するような建築物の設計ないし施工を依頼することはないため、明示の合意がない場合であっても、原則として、契約当時の建築基準関係規定、特に安全性に関わる規定に適合した建築物の設計、施工、ないし監理を行うことが、施主との契約内容になると解されています。したがって、建築基準関係規定に違反する建築物が設計ないし施工された場合は、契約が無効とされる（設計を完了しても報酬の請求ができないことになる）、設計、施工、監理契約上の瑕疵担保責任、あるいは債務不履行責任等が問題となります。

判例の考え方

この論点については、施工の事案において最高裁の判例があります（最高裁平成23年12月16日判決）。事案は以下の通りです。

施主と請負人（元請負人）は、建築基準法等の法令の規定に適合しない建物の建築を目的とする請負契約を締結しました。その際、賃貸業の採算を確保するため、建築基準法等に違反する建物を建築する合意をしました。この合意を履行するために、確認済証の交付を受けるための確認図面と、実際の施工に用いる実施図面（確認図面では存在しない貸室を地下に設ける、確認図面では吹き抜けとされている部分を利用して貸室を増加させる、等の内容）を用意したのですが、実施図面の通りに施工した場合、耐火構造に関する規制違反、北側斜線制限日影規制、建ぺい率制限、容積率制限違反等が生じる内容でした。元請負人は下請負人に対し上記建物の建築を請け負わせました。下請負人は上記の違反建築の内容を了

解していました。結局、施工中に区役所において確認図面と異なる施工がなされていることが判明し、区役所の指示により下請負人は是正工事を行うことになり、追加変更工事分を含む請負残代金約2610万円を元請負人に請求した、というのが本件の事案の概要です。

本件では、下請負契約の内容は建築基準法等の法令に違反しているため、そもそも契約が無効である（つまり報酬を請求できない）のではないかが争点となりました。

最高裁は、注文者と請負人が建築基準法等の法令の規定に適合しない建物の建築を目的とする請負契約を締結した場合において、次の(1)から(3)など判示の事情の下では、上記請負契約は、公序良俗に反し、無効であるとししました。

- (1)上記請負契約は、建築基準法所定の確認及び検査を潜脱するため、法令の規定に適合した建物の建築確認申請用図面のほかに、法令の規定に適合しない建物の建築工事の施工用図面を用意し、前者の図面を用いて建築確認申請をして確認済証の交付を受け、一旦は法令の規定に適合した建物を建築して検査済証の交付も受けた後に、後者の図面に基づき建築工事を施工することを計画して締結されたものである。
- (2)上記建物は、上記(1)の計画どおり建築されれば、耐火構造に関する規制違反や避難通路の幅員制限違反など、居住者や近隣住民の生命、身体等の安全に関わる違法を有する危険な建物となるものであった。
- (3)請負人は、建築工事請負等を業とする者でありながら、上記(1)の計画を全て了承し、上記請負契約の締結に及んだのであり、請負人が上記建物の建築という注文者からの依頼を拒絶することが困難であったというような事情もうかがわれない。

最後に

上記の最高裁判例は事例判断であり、建築基準法等の法令に違反した設計を行っても契約の効力が認められる場合もありますが、そもそも、建築基準法は国民の生命、健康及び財産の保護を図ることを目的とする（同法第1条）ものですから、法令違反の設計を持ち掛けられた場合は毅然と断るようになっていただければと思います。

人生を紡いでくれた卒業設計



末光弘和

1999年東京大学卒業 / 2001年東京大学大学院修了

世界の第一線で走る建築家

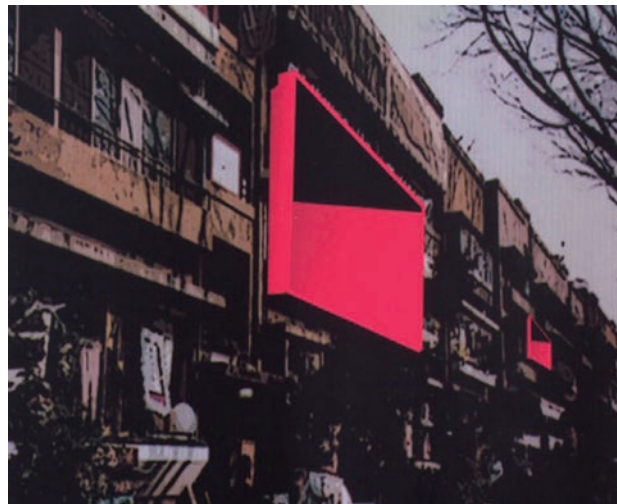
私が卒業設計をしたのが1998年、私たちは東京大学に安藤忠雄さんが教授としていらっしゃった際に最初に見ていただいた学年であった。当時、安藤さんはプリツカー賞を取られた直後で、まさに一番脂が乗り切っていた時期だった。アカデミックどっぶりの場所に、世界の第一線で走る建築家がやってきて、設計の指導をしてくれる、そういう独特の興奮感に学科全体が包まれていた。当時、安藤さんには世界の一流の建築家を大学に連れてきてレクチャーをしてもらっていて、ヌーベル、ピアノ、ゲーリー、ペローといった名だたる建築家の生の声を聞き、彼らのエネルギーを肌で感じたことを覚えている。彼らは、人生で何を大事にしてきたかを語ってくれた。

同潤会青山アパート

当時、安藤さんが森ビルと計画されていたのが、表参道にある同潤会青山アパートの再開発であった。けやき並木に沿っていくつものアパートが建ち並ぶその佇まいは、表参道のシンボルであった。それを壊して建て替えるという計画だと聞き、これはまずいと思い、建物を残しながらできる提案を考えた。ただ残すだけではつまらないので、新旧が混ざり合った提案にし、都市に刺激をもたらしたいと考えた。古い同潤会アパート自体も、その当時、いろいろなショップが入り、カラフルなショーウィンドウが入り込んでいたので、それにヒントを得て、壁のように建ち並ぶこの古いアパートに赤い穴を挿入し、その裏側から表参道に向けてのさまざまなアクティビティが滲み出す建築を提案した。

中間講評会

中間講評会で、安藤さんの前でプレゼンする機会があり、古い同潤会アパートの写真に赤い穴をコラージュしたコンセプトイメージと、簡単な断面模型をぶつけてみた。今考えたら、一学生が世界的な建築家に嘸み付いて、「その計画ではダメだ」「この建物を残しながら計画すべきだ」とプレゼンしたのだから、本当に失礼だったと思うが、安藤さんは大きな懐でそれを受け入れ、「オモロいやんか」とかなり褒めてくださり、その後もよく面倒を見ていただいた。後に、学外のコンクールにこの卒業設



卒業設計「Process of Change～壁の記憶」(JIA東京都学生卒業設計コンクール銅賞)

計を応募する機会があり、当時審査委員長だった伊東豊雄さんとそこで出会い、その後伊東さんの事務所に勤めるようになったので、この卒業設計は、僕の人生にとってかけがいのない機会となった。

建築における「時間」の概念

この卒業設計は、僕の人生においてももうひとつの意味を持った。当時、刹那的な再開発のあり方自体に問いかけをしたいと思い、時間軸で徐々に都市に対して表情が変わっていくようなことを提案していた。その時は、建築における「時間」の概念について興味があり、伊勢神宮やメタボリズムなど、変化していく建築に興味を持って、ポートフォリオでもそういうテーマでまとめていたのを覚えている。自分でもこの興味は何だったのだろうかと思っていたのだが、30年近く経った今になって、このことがつながり始めたから不思議なものである。自分がサステナブルな建築を考えるようになったことがきっかけである。最近の自身の研究の結果、持続可能性をもたらす建築には「時間」の概念が必要であると仮説を立てるようになった。確かに今までの建築計画の概念にはそのことがごっそり抜け落ちている。今、計画中の市庁舎のプロジェクトや取り組んでいるコンペでも積極的にこのことについて提案をしている。今後、自分の建築観にどういう影響を及ぼしていくのかわからないが、卒業設計から考えたこの思想の種を、人生をかけて育てていきたいと考えている。

スタジオ・ダニエル・リベスキンドにて



会田友朗

2003年春。大学院を修了した僕はニューヨークへ戻り、9月、スタジオ・ダニエル・リベスキンド(以下 SDL)に入社した。ロウアー・マンハッタンビル街、19階に位置する事務所の窓からは「グラウンド・ゼロ(9.11のテロで崩壊したワールドトレードセンター跡地)」越しにエンパイアステートビルがよく見えた。SDLはWTC跡地のマスタープラン・コンペに勝利し、事務所をベルリンからNYに移転したばかり。毎日のようにメディアが取材に来るなど、所内は常に騒然としていた。パートナーのニーナが、携帯電話を両手に持って事務所内を早足で歩き、いつも大声で(おそらくは要人らと)会話をしていたのをよく覚えている。

ニューヨーク事務所の日常

当時のSDLは約40人規模で、半数ほどのアメリカ人スタッフがWTCマスタープラン専従のチームに属していた。残りはベルリン時代から働くヨーロッパ人が中心で、大規模コンペや世界各地の仕事をこなしていた。所属したチームで僕は、主に香港市立大学の約3万㎡の校舎の基本設計に携わった。AutoCADとFormZによる検討が主な業務。香港のローカル・アーキテクトとの協働や、エンジニアのArupチームとの打合せも経験し、刺激に満ちた日々だった。所内をうろろろしているダニエルがふと気になる模型や図面に目をとめると突如打合せが始まる。コンセプトを語りながらも、建築内部での具体的な空間体験を想定し、早口で情熱的にまくしたてる。あるとき、壁と天井の交わる角度の変更を指示するため、検討中のCGパースが映る僕のPC画面にダニエル本人がマスキングテープを貼って去っていった。途方に暮れる僕に、チームメンバーのひとりが笑いながら軽くウィンクした。

場所の感覚(a sense of place)／建築の記憶・意味

なぜSDLで働くことを決意したのか。自分でも明確な説明ができずにいたが、不思議なことに20年の月日を経た今、巡り合わせを強く感じる。つくりだす建築形態の特異性に目が行きがちなりベスキンドだが、土地の歴史・文化に対し己の感覚をもって向き合い、人々のための居場所をつくり、建築の持つ豊穡な意味世界に思考を巡らせる建築家だという点で、深い共感を覚える。例えば、WTCコンペにおいて、有名建築家たちによる、崩

壊したツインタワーを凌駕するような象徴的・複合的な巨大タワー建築の提案が並ぶなか、SDL案は一見して派手さには欠けるものの、ツインタワーの基礎防護壁(スラリーウォール)の保存・再生、建築の隙間(ヴォイド)から差し込む光を重視した配置計画、建物頂部をグラウンド・ゼロに焦点を合わせスパイラル状の傾斜に揃えるデザインコード等、ニューヨークという都市の記憶の継承を意図した都市デザインの提案で際立っており、結果として一等を勝ち取ったのである。

僕が在籍していた時期の著書『ブレイキング・グラウンド～人生と建築の冒険』(鈴木圭介訳・2006年・筑摩書房)を読むとリベスキンドの考えが平易な文章でリアルに伝わってくる。

「建物には心も魂もある。ちょうど都市にもそれがあるように。私たちは建物に記憶や意味を感じ取り、建物が呼び起こす精神的、文化的な希求を知覚する。」(p.17)

「居場所という感覚。これは冒し難いものである。」(p.47)

「私には目標は過去の再生ではなく、再解釈であるという信念があった。」(p.51)

「建築とは、最終的には、自分の居場所を望む通りに作ることに帰する。」(p.75)

「私は昔から建物を、読まれることを意図した一種のテキストのようなものと考えてきた。」(p.100)

連載の初回、僕が大学で景観論を学んだことについて述べた。生成し読まれるテキストとしての風景学と、ベルリン・ユダヤ博物館に代表されるリベスキンドの記憶と意味を重視する建築観。都市や風景が生活者によって解釈されてさまざまな物語が生まれる一方、建築家は想像力と創造力をもって場所に新たな意味を刻む。まだ道半ばだが、今後の設計活動のなかで、これらの思想を自分なりに架橋していきたい。

Run Run Shaw Creative Media Centre
(香港市立大学)

『ブレイキング・グラウンド』

2023年11月9日(木)、10日(金)、11日(土)に愛知県常滑市で開催された「JIA 建築家大会 2023 東海 in 常滑」の参加レポートをお届けします。

建築家大会に参加して

—「注目の若手建築家による建築討論」に登壇—



井原 正揮

昨年11月9日から11日に開催されたJIA建築家大会2023東海in常滑において、私は初日のJIA全国10支部合同企画「注目の若手建築家による建築討論」(以下、若手討論)で関東甲信越支部の若手として登壇した。また、私たちの事務所がファイナリストに残った「西尾市生涯学習センター(仮称)コンペシンポジウム」(以下、シンポジウム)の最終審査作品展示資料提供と、WG主査を務めている「建築家のあかりコンペ2023」(以下、あかりコンペ)の展示および最終審査の運営に携わった。ウェルカムパーティーへの参加を終えた後、翌日の大学講義のために早々に帰京せざるを得なかったが、この短い時間でさえ、非常に有意義で刺激的なものであった。

今回の大会テーマ「環る」とそれに合わせたサテライト型の大会運営は、地域性や場所性に光を当てたテーマであるが、その裏に新型コロナパンデミックや世界各地の紛争などのグローバルな問題を透かして見るができた。また、これらの社会的変化は、リモートワークやワーケーションのあり方、そしてサードプレイスの重要性について市井での活発な議論を促した。レイ・オルデンバーグによれば、サードプレイスは「家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、さまざまな公共の場所の総称」である。大都市ではカフェやサロンなどがそれに該当する一方で、小さな町では、路上や公共の場所がこの役割を果たす。JIAでの活動自体がサードプレイス的な役割を内包することを考えても、常滑の町に、そしてJIAの大会にふさわしいテーマである。常滑は、陶器の生産で知られる歴史的な町でありながら、産業構造の変化により、多くの煙突や窯が本来の役割を終えて遺構として残されている。しかし、人と町の関係は常に変化している。アップサイクルや新たな価値の創出といった持続可能性を見出すことで、新たな町へと生まれ変わる、そのチャンスをうかがっている状況の中でのチャレンジングなテーマであると言える。

各イベントについて簡単に触れたい。はじめに参加したのは、若手討論である。3名のモデレーターと10支部から選出された若手建築家による建築討論で、大会

ウィーク期間にオンラインイベントとして全3回開催され、大会当日は各回の登壇者が一堂に会しての討論を行うものである。時間が限られている中で登壇者同士の議論がやや不足していた部分はあるが、各々の地域や人柄にふさわしい建築家のあり方を同時に聞くことのできる貴重な体験であった。また、それらに通底する現代の建築的傾向や課題を瞬時に炙り出すモデレーターの手腕は素晴らしかった。2番目は常滑市民文化会館で行われたシンポジウムである。若手討論とあかりコンペへの参加のため、残念ながら様子をうかがうことが叶わなかったが、ファイナリストのパネルや模型展示のおかげで、ウェルカムパーティーではコンペのあり方について諸先輩方と議論ができたことは、私自身の設計活動において重要な道標となると感じられた。最後にあかりコンペ。今回のテーマは「贈るあかり」である。社会全体が定量的な考え方から定性的な考え方への転換、あるいはその萌芽を感じることでできるテーマであり、それに応えるような最優秀案が選ばれた。

グローバル社会において、テクノロジーが時間と空間の隔たりを消滅あるいは減衰させることで、世界と自分の距離は縮まり均質化が進んでいる。その一方で、世界中の情報が手の届くところにあり、異文化へのアクセスが容易になったことで、個々の文化や価値観への関心が高まっている。グローバリズムがもたらす多様化の中で、ローカリズムは自己同一性と地域性の再確立を可能にし、グローバル社会の中での個別のアイデンティティを強化する。このように、グローバリズムとローカリズムは相互に作用し合いながら、世界の多様性と独自性を形成しているのである。



陶楽窯の煉瓦と
目地から生える雑草

大会に参加した学生のレポートと、プレウィーク(10/12～11/8)に開催された学生の会@joint主催のイベント報告です。

新たな視野が広がる大会

JIA 学生会員 長谷川理奈
日本大学大学院 2年



今回@jointとして2度目の参加となる全国大会。今年はプログラム内で「原風景ワークショップ」という学生の会主催のイベントも初開催しました(詳細は次頁)。この大会を通じて、今年は地域を越えて、建築家の皆様だけでなく、建築学生ともお話をすることができ、@jointの活動の幅を広げることができたのではないかと思います。

また、常滑大会に集まった関東メンバーは、構造や歴史、地域デザインなど、それぞれ専攻している分野が異なることから、建築を見る時の視点もさまざま、お互い情報を交換することができました。常滑の街から土や陶器にも着目して



大会3日目、エクスカーションでLIXIL榎戸工場を見学。引率は広報委員の関本竜太さん

建築を見る目を肥やしつつ、学校の座学だけでは培えない新たな建築を学ぶ視野を広げることができました。

学生一同とても充実した大会期間を過ごすことができ、運営の方々をはじめ、学生を暖かく迎えてくれた皆様、本当にありがとうございました。2024年度の大会にも@jointの学生会員がまた参加できればと思っていますので、ぜひよろしくお願いいたします。

やきもの散歩道エリアを散策

JIA 学生会員 伊藤綾香
日本大学理工学部 4年



やきもの散歩道エリアは、伝統的な窯屋やレンガ造りの煙突、焼き物を使った道や擁壁などが独特な景観をつくり出していました。焼き物が集まることで形成されたこの道には、さまざまな見所があります。散策はあいにくの雨模様でしたが、雨水が焼き物のツヤを際立たせ、散歩道全体を彩っていました。排水のための側溝も焼き物でつくられていて、水が綺麗に駆け下りていく様子はそれだけで見ものです。割れた舗装タイルを新しいタイルで補うように継がれているところも散見し、景観を大切に守ろうとする人の温かみを感じることができました。また訪問したいです。

タイル巡り

JIA 学生会員 奥平康祐
日本大学大学院 2年



大会のプログラムの中で@jointメンバーの関心が高かったタイルに関する施設を巡りました。多治見市モザイクタイルミュージアム(設計:藤森照信、2016)は、全体が塗り壁で仕上げられ、外装やサインなどいたるところにタイルの意匠が施された温かみのある建築です。タイルの製法や彫刻等がさまざま展示され、親しみを覚えました。大会の案内で訪れたINAXのタイル博物館では、常滑に限らず世界中のタイルが展示され、歴史の奥深さに触れることができました。常滑の街中にもタイルの意匠が多用されており、道の舗装や店舗の看板など、歩くのが楽しくなるような街並みでした。

LIXIL 見学

JIA 学生会員 小山満大
東京電機大学大学院 1年



大会3日目のLIXIL榎戸工場の見学は、便器製造の緻密な工程と歴史に深く触れることのできた貴重な体験でした。伝統的な窯業技術と自動化技術の融合が、高品質な衛生陶器の製造に重要であることがわかりました。製造工程は、伝統的な石膏型鑄込み成形からロボットを使用した自動化ラインへと進化していますが、基本的な原料は変わらず、伝統と技術革新の共存が印象深いです。さらに、機械だけではなく、作業員による細かい品質管理が高品質製品の鍵であることもわかりました。この見学を通じて、技術の進化と伝統技術のバランスの重要性が深く印象に残りました。

交流会

JIA 学生会員 高橋花穂
東京電機大学 2年



交流会では建築家の方々をはじめ、多くの方とお話することができ、将来のビジョンを深めることができました。JIA所属の中でもデザイナーやプロデューサー、音楽をやっている方との出会いもあり、特にウェルカムパーティーで佐藤会長がサクスを演奏されていたのが印象的でした。建築とさまざまなものを融合することで、建築をより親しみやすく豊かなものにできたら面白いと思います。

その後も大会でできた繋がりで、さまざまなイベントに参加しました。ここで得た知識や経験、繋がりを大切に、これからも励んでいきたいです。

JIA 全国学生の会@joint サミット

—原風景ワークショップ—



学生の会 @joint
日本大学
伊藤綾香

全国大会プレウィークのプログラムとして、10月28日に学生の会@joint主催のワークショップを開催しました。JIA全国大会で初の試みとなるこのイベントでは、自身の出生地である「原風景」と他者の「原風景」を交換し、新たな建築を考えるきっかけとなることを期待しました。

オンラインでの開催により、関東以外にも、東北、中部、近畿など、全国から6人の学生が発表者として参加しました。海外を訪れ、自分の育った地と現地で出会った街の比較を旅行感覚でプレゼンしてくれた方、出生・幼少期・大学と拠点を変えて暮らしてきた方など、原風景を位置付けるにあたっての考え方も合わせてお話しいただきました。同じ県でも印象の異なる風景や、逆に異なる県でも共通点が見出されるなど、興味深い「原風景」の交換が行われました。また、後半にはJIA正会員の皆さんにもご参加いただき、意見交換をすることができました。

私はこのイベントの司会を担当し、何よりも自分自身の収穫になりました。自身の建築へのアプローチの原点

や、他者の「原風景」と建築の思考との関連性など、建築に対する新たな洞察が得られたように感じます。私にとっての当たり前が誰かにとっての特別で、誰かにとっての当たり前が私にとっての特別で。当たり前のことですが、生まれも育ちも年齢も異なる個性豊かなメンバーが集い、話げたことは貴重な経験となりました。私自身コロナ真っ只中に大学生になり、他の学年と比べて現地に足を運ぶ経験が少ないと感じているので、実体験を踏まえた話にワクワクしました。後半には、JIA会員の皆さんも参加され、参加者全員が柔らかい雰囲気をつくってくださったので、楽しみながら司会をすることができました。

学生の会@jointとしても、全国大会のプログラムへの参加はとても大きな一歩となりました。実際に関東以外の学生と交流することで、新たな知識の共有や発見などがあり、JIAならではの繋がりを今後も大切にしていきたいと思います。



参加者の発表資料

参加者の感想

鈴木葉大 (静岡理科大学理工学部建築学科 修士2年)

参加が決まってから自身の原風景について考えました。直前にヨーロッパを周遊しており、比較してワークショップに参加しました。ヨーロッパの風景・自身の育った「静岡」の風景を改めて考え直せた貴重な時間でした。

上村宗資 (三重大学工学部総合工学科建築学コース 学部4年)

今年度から学生会員となり、学生主体のワークショップに参加するのは今回が初めてでしたが、他大学の皆さんと原風景や建築について日々考えていることをお話しできたことは大変貴重な経験になりました。

奥平康祐 (日本大学理工学部建築学科 修士2年)

「原風景」をテーマにした各自の発表は、支部を超えた各地域のメンバーが集まったことで、地域差や共通点を発見し大いに盛り上がりました。途中からは正会員の方々にもご参加いただき、充実した会となりました。

私の建築人生を振り返る



のうす
野生司義光

私は本年をもって75歳になろうとしています。私が建築学科に入り、卒業して社会人になり今日に至るまで、50数年の年月を建築に費やしてまいりました。いや、その前も父が建築家であったため、生まれた時からそのような道ができていたかもしれません。その私の人生を振り返ってみようと思います。

私は父と一緒に建築の設計をしたことはありません。しかしながら、「建築家のプロフェッション」について昔から聞かされ続けてきました。大学を出て、「松田平田坂本設計事務所」に入社しました。当時の「松田平田」には、松田軍平先生のフィロソフィーが強く残っていました。

1. 設計は本社だけで行う。大阪事務所(当時は連絡事務所と言っていた)では設計を行わない。
2. 地方の仕事は地方の事務所と共同で行う。
3. 民間の仕事8割。官庁の仕事2割。

当時、他の大手事務所は官庁の仕事が5割を超えていたと思いますから、大手事務所の中でも一線を画していた事務所だったと思います。その中、最初に坂本俊男先生から言われたのは、5年経って仕事を任されなければ、実力が無いと思え、ということでした。

最初(入社5年目)に任された仕事は、「山形県信連事務センター」でした。中身はコンピューターセンターです。この仕事は、山形の「本間利雄設計事務所」との共同設計です。松田平田が基本設計をし、実施設計は本間事務所が行い、監理は本間事務所(建築常駐監理)と松田平田で行いました。この時に日本では希少価値だった断熱性が優れているPPG社の複層反射ガラスを使用しました。

事務所に入って10年を過ぎたころ、「宇都宮市庁舎」の指名コンペの担当者に選ばれました。その案は行政棟と議会棟が並行して建つ案です。今でもこの案は素晴らしい案だと思っています。残念ながら、一等案に選ばれませんでした。このことは、私の人生で最大の悔やみになっています。30代半ば過ぎに担当したのが「新目白ビル」です。今現在野生司事務所が入っています。地下に240坪の「典座御坊八山」という日本料理屋と最上階には220坪の住宅が載っています。住宅には小間、広間を有する30坪の茶室があります。この料理屋とお茶室

を設計したことにより、独立後の「久兵衛本店」の仕事に繋がりました。この仕事と並行して「横浜市立大学付属病院」の設計をしました。この建物は総工費600億円の仕事で、当時、横浜市として歴代最高額の仕事でした。延床面積60,000㎡、600床の病院です。ワンフロア、4看護単位で、井桁型のプランです。このプランは今までに例のない初めて採用されたプランです。

この建物が竣工して、その仲間と「野生司環境設計」を設立しました。42歳の時です。総勢4人でスタートしました。それをきっかけに、大学から設計を教えに来いと言われまして、非常勤講師として何うようになりました。そのおかげで、アルバイトの学生には不自由せず、新入社員も教えていた中で優秀な学生を入れることができました。事務所が好スタートを切れたのも、スタッフに恵まれたおかげだと思います。最初の仕事が「久兵衛オータニタワー店」の内装です。続いて「銀座久兵衛本店」の仕事が入りました。伊藤忠不動産からは、日本橋に総合設計制度を使ったオフィスビルの仕事をいただきました。その後も順調に事務所は成長できたと思います。

昨年(2023年)の秋に、私が松田平田から独立するとき、「野生司さん独立しませんか、独立するなら私一緒についていきます」と言った、伊東俊之さんを社長にして、会長職として現在仕事をしております。



宇都宮市庁舎
設計競技応募案



横浜市立大学付属病院(1991年竣工)

改修設計での学び



長友寛昌

16年前、何の伝手もないなか独立し、近年になってようやく安定した業務を行うことができるようになった。公共建築設計で一定の信頼を得ることができたためか、現在は行政の仕事をメインに活動をしている。

公共建築設計は改修設計が大半を占めている。私は過去にさまざまな工夫をしながら新築の設計を行い、多くのことを学んだが、公共の改修設計ではまた違った経験や知識を得ることができる。

改修設計は既存の設計図を読み込むことからスタートする。なぜこんな設計にしたのかと思うこともあるが、なるほどと感心させられることも多い。使われている材料、当時の法規制、構造の概念等、時代により異なる価値観や設計者により異なる設計手法を読み解くことができ、幅広い知識を得ることができる。

また改修設計における構造の考え方は新築案件とは大きく異なることを学んだ。新築と耐震改修の構造計算は根本的な考え方から異なるが、新耐震と旧耐震、耐震改修をしているか否かで検討内容を変えなければならない。

建物の長寿命化を目的とした改修工事は建替えと比較してコスト面のメリットはあるが、改修内容に限界があり100%満足できる設計ができないというデメリットもある。長寿命化か建替えかの判断について、今後はコスト以外の幅広い視点での検討が必要になるだろう。

現在当社は改修設計ばかり手掛けている。ポテンシャルアップのためにも新築の割合が増えたら良いなと思う今日この頃である。



鷺沼ふれあい広場休憩舎（3年ぶりの新築設計）

雪が降る日のこと



海法 圭

普段トークイベントをする際に、スライドの1枚目に必ず入れる写真がある。東京に雪が降った日の写真だ。

社会に出て、大きな金額を扱う建築設計に携わり、ときに挑戦的な提案をする立場になって実感したのは、この世の中の物事やデザインの大半が責任問題や人間関係で決まっている点だった。ここで怪我をしたら誰が責任をとるのかとか、個人的には応援したいが会社の立場からはOKと言えないとか。今思うとそれは大前提として、なおこの世界を少しでも美しくするのが建築家の実力かもしれないが、若い自分にはルイス・キャロルの物語よりよっぽど不思議な世界に見えたのであった。

東京の雪の話だった。雪が降ると電車は止まり、打ち合わせには遅刻する。ただその日に限っては、こんな日はしょうがないよ、と誰かがつぶやく。地球上を巡り巡って降り注ぐ雪という大きな環境体が、人間が本来持つ優しきや強さを思い出させてくれる瞬間である。

建築設計においても、僕はこの瞬間をデザインしたい。人知を超えた大きな環境体と、お母さんの日常生活の接点を、いかに空間や設えの問題に置き換えて両者の関係を再構築するかが問われる。2021年に設計した「上越市雪中貯蔵施設ユキノハコ」は、まさに雪と棚田の農家さんの接点を考える稀有な機会であり、豪雪地で農業を営むことを誇りに思える場所にしようとな努力した。これからもこの難しい命題をたずさえて、世界をほんの少しでも美しくしていきたい。



上越市雪中貯蔵施設ユキノハコ、外観

交流委員会 Aグループ

建物見学会開催

—東京スカイツリー天望台見学—



交流委員会
Aグループ
横森製作所
梧桐直人

交流委員会Aグループの建物見学会を、昨年10月10日(火)、東京スカイツリーにて実施しました。多くの方がご存じと思われますが、当施設は、墨田区にある複合商業施設「スカイツリータウン」を併設した自立式電波塔です。最高点は634mを誇り、日本一の高さです。地上デジタル放送の送信を行う電波塔としても有名です。

誰もが知っている施設ですが、「灯台下暗し」で、実際私も含めて展望台に昇ったメンバーは意外に少なく、ある種の高所恐怖症感を味わうために参加する方もいるようです。

当日、総勢17名が集まり、4階から高速エレベーターで一気に天望デッキへ。乗客は定員の40人満員で、時速600m/分ですから50秒で地上350mに到着しました。休日ではないのですが、とにかく凄い人です。コロナ明けでインバウンドも手伝い、半分以上が外国の方で、外国語で感嘆している言葉が聞こえてきます。私の第一印象としては、恐怖感はありません(多くの人が窓枠に連なりそれがガードのようにになっているからか)、しかるべき揺れも感じません。これも、実は塔の心柱がRCになっているのが理由かもしれないと思いました。東京の街は、太陽の光の具合で白色からグレー、さらに金色にと変貌して感動します。

さて、さらに上階の展望台があるのをご存じでしょうか？天望回廊といって、天望デッキから100m上の高さ450m付近にミミズのはったような登り廊下ガラス張りのシースルーで付いています。それが今回の見学の最高地点ということで、参加者のみなさんが期待している空中散歩と相成ります。再度高速エレベーターに乗り、地上445mから本命の廊下を渡りましたが、京都の伏見稲荷の鳥居をくぐるような感覚で、なぜか神妙な心境で渡りきりました。高所恐怖症ではないのですが、異次元の環境は普段と違う新鮮なものを感じました。

天望デッキには、目玉として足元に2×3mのガラス床が設置されています。下の景色が筒抜けに見えるのですが、コース動線があるので気が付かないで通りすぎる人もいます。あまりにも高すぎて下の景色が小さく見えるので、私は恐怖感はありませんでした。他のメンバー

は写真を恐る恐る跨ぐように撮っていましたが…。東京タワーにも確か同じようなものがありました。私はそちらの方が怖いという印象を持ちました。

竣工から早くも10年経っていますが、遜色なく内装自体も非常に機能美にあふれた仕上げとなっており、コーヒーショップも併設されていてお洒落です。帰りのエレベーターは人が数珠繋ぎで並んでいて、40人乗りでも降りるのに1時間くらいかかりました。1階ではパイプ柱脚と基礎を、これもシースルーで見ることができませんが、その大きさにメンバー方々驚愕していました。

最後に「スカイツリータウン」の商業施設も見学しました。ファッション、グルメな店が軒を連ねていて、大変人が多かったですが、なんでも揃う便利な感じがしました。

前回の見学場所、「東京都庭園美術館」は落ち着いたアールデコ調の建物でしたが、今回は機能美というか最新技術に裏打ちされた無駄のない特殊建造物を見学でき非常に勉強になりました。同時に、Aグループとしてさらに技術的親睦を図ることができたと思っています。

私事になりますが、交流委員会Aグループ横森製作所後任として2年くらいが経ちます。グループ内の担当を受け持つにあたり、各委員の方やグループ内の先輩のご指導には、いつも感謝の念に堪えません。今回の見学会においても、各メンバーのご協力で開催できましたことを付け加えておきます。



東京スカイツリー1Fチケットカウンター前での集合写真

交流委員会 Eグループ

納涼屋形船施設見学会開催



交流委員会
Eグループ代表幹事
中電工
石津浩章

私ども交流委員会Eグループは、電気設備業者および照明や弱電、電気機器メーカーで構成されています。

コロナ禍はWeb会議を、当初はパソコン設定に苦労しましたが、会員皆様のご協力を得ながら開催し、法人協力会員数社での企業セミナーを開催するまでに至りました。昨年から3年ぶりの対面会議に戻り、改めて対面でのより活発な意見交換ができ、直接話し合う大切さを実感することができました。

昨年は今までにない酷暑が続き、12月に入っても25℃を超える真夏日に見舞われるなど、経験したことのない状況が続きました。建設業界でも地球温暖化対策や、災害防止等に本気で向き合う必要を感じました。

建設業界では、物価の上昇や物資の不足が続いているにもかかわらず、大型建物を含めた建設ラッシュが続いています。電気業界では電線ケーブルの供給が追いついていない状況もあり、当社もさまざまな環境の変化に対応しながら対策を講じているところです。

Eグループの活動では、7月の納涼屋形船での施設見学会と年末のグループ会議後の懇親会が恒例行事となっています。毎回、多くの正会員の方々にご参加いただき、東京湾で屋形船の船上から見渡せる高層ビル群や大型施設のライトアップを鑑賞しながら、時代の移り変わりを肌で感じ、多くの意見や考えを出し合える場となりました。そしてお酒の力も加わり、皆の交流もヒートアップして最高潮となり、さらにそこから二次会に流れていき取捨がつかなくなります。

私は昨年5月にEグループの代表幹事を拝命し、微力ながら正会員・法人会員関係者の皆様方と共に活動しています。今後も交流委員会の活動を通じ、より多くの正会員や法人会員の皆様と交流を深めることができればと思います。

今年は、法人会員から積極的に各委員会に出席することで、正会員主催の活動にも参加し、法人会員としてのメリットである正会員との情報交換ができる機会を増やしていければと思います。

広島出身ということもあり、広島東洋カープの大ファンであるのは言うまでもありませんが、今年こそはリーグ優勝を目指し、その勢いで交流委員会も盛り上げていきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



屋形船で東京湾を周遊



海沿いの施設のライトアップを見る



参加者全員で記念撮影

第2回まち歩き 「東京サイハッケン」を開催しました！

—六本木・表参道・千駄ヶ谷—



学生の会 @joint
昭和女子大学
環境デザイン学科1年
小柳日菜子

学生の会@jointでは、昨年8月12日(土)に第2回まち歩きイベント「東京サイハッケン」を実施。今回は一度は見ておきたい都心の建築や街並みの魅力を探して歩いた。

21_21 Design sight

日本を代表する建築家安藤忠雄によるデザイン専門施設。2005年竣工。三宅一生をはじめ日本屈指のデザイナーをディレクターに迎え、デザインへの理解と関心を育てる場として、「日常」をテーマにした展覧会を行っている。

魅了された点は、草木・空(自然)とコンクリート(人工)という相反するモノ同士が調和している外見だ。施設の大



半は埋設されており、外見からは想像がつかない広い地下空間と、そこに差し込む光は幻想的だった。

特徴的な屋根

サニーヒルズ

隈研吾設計、2013年竣工。日本の木造建築に伝わる「地獄組み」というジョイントシステムを用いており、内部は隙間から差し込む光でやわらかい空間になっている。夜は内側から漏れ出る光でより綺麗だ。

国立新美術館

黒川紀章設計、2003年竣工。この建物が持っている迫力や魅力は誰をも魅了するであろう。美しく波打つガラス張りの壁と逆円錐型の柱はどこか異世界に



美しく波打つ外壁

歩いてみて

道を曲がるたびに雰囲気が変わる街並みが意外だった。原宿、表参道、青山、代官山、恵比寿など、個性豊かな街が点在する。渋谷駅周辺は再開発が進んでいる。常に世界から注目され続ける街として、環境や時代に適応しながらどう変貌していくのが楽しみだ。

次世代のタマゴたち



竹と土の「わたしたちの空間」

学生の会 @joint 工藤考史
東京工芸大学工学部建築コース3年

昨年10月、私と@jointのメンバー数名で、埼玉地域会主催の空間デザインワークショップのお手伝いをしました。場所はさいたま市の別府沼公園内にあるヒアシンズハウス前の広場です。このプロジェクトは身近な材料や素材を使って、時には地域の人を巻き込みながら、実寸大で何かをつくろうというもの。2013年から毎年行われており、今年はドーム(星型の開口があるのでスタードーム)を竹・土・簾で制作しました。

竹の骨組みや高所での作業は私たちが担当し、土壁や装飾などは公園で遊んでいる子どもたちや、埼玉地域会など参加メンバーのお子さんたちに手伝ってもらいました。子どもたちは泥んこになりながら土壁を塗り、中には特に指示せずとも装飾をしだす子もいました。同じ空間を皆それぞれ好きな



完成間近のドーム

ようにデザインすることで、かえってある種の一体感があるように思えました。使用した竹はすべて規格がなく不揃いなので、さまざまな想定外のことが起こりました。土も塗った後に日光で乾燥させる予定でしたが、途中で雨がパラパラと降ったりもしました。実寸大のものをつくること、自然に近い材料を使うことの難しさを痛感しました。それと同時に地域の人と一緒に制作することの可能性も感じました。作業をしていると「これは何をやっているの?」や「すごいね」などと声をかけられます。完成後にドームの中で小さな演奏会を開いたのですが、通りすがりの人や子どもたちが中に入ったり、星型の開口から中の様子を覗いたりしていました。

ワークショップを通して、表現することでその空間の当事者になることは、狭い空間であれ広い地域であれ、一体感を出す1つの解決策だと思いました。

瓢箪から駒が出た

島根県で博物館の設計をしていた時のこと、町の町長さん宅で手打ち蕎麦をいただいた。どうやらそのお母さんが打たれたらしい。町長曰く「蕎麦を打てないと嫁に行けん」。ですから、どこの家庭でも蕎麦打ち道具はあるらしい。「お父さんは打たないのですか」と聞くと、みんな打てると言う。実はそんな説は島根県には無い。私はすっかりそれを真に受けてしまった。町長さんはさらに「萬野さんも建築家なら、引越蕎麦で建築の完成を祝つたらいいなあ〜」とも言われた。私は生まれも育ちも大阪のうどん文化育ちなので、蕎麦にそれほど執着はなかったのですが、この町の夏祭りの屋台の蕎麦でスイッチが入ってしまった。プラ丼で出された出汁をぶっ掛けただけの「冷や蕎麦」が妙にうまかった。その後、同県の松江でも別格に美味い割子蕎麦に出会い、「引越蕎麦を打ってみようか」と思い立ち、手打ち蕎麦を始めた。

初めて人前で打ったのが、石見銀山^{いわみ}を有する島根県大田市の住宅(1999年)のお披露目会だった。割子蕎麦で有名な地域で、初心者の手打ち蕎麦を披露したのだ。今になって思えば、恥ずかしいやら申し訳ないやら。その後、京都芸術大学(旧京都造形芸術大学)の学園祭で学生と共に屋台を出して2日で150人前を売り上げた。今では有名になったアイドルなども立ち寄っ



京都芸術大学・瓜生山祭、学生デザインの屋台で出店 右上が筆者

ていただいた。また、JIA全国大会京都(2009年)の準備期間に「今日は蕎麦が出るぞ〜」のアナウンスをして、人集めに一役を果たした。その後も評判が良くて、交流会や行政との懇親会にも手打ち蕎麦を振る舞った。最近はお出前で手打ち蕎麦を頼まれたりするので、建築の営業になればとの下心もあって引き受けるのだが、未だに設計の仕事につながったことはない。

いろいろな説があるが、引越蕎麦は近所に配るものらしく、「永〜い、お付き合いをしてください」って意味があるそうだ。私が竣工のお祝いに蕎麦を振る舞って完成としているのは、地鎮祭、上棟式に並んで「末永く建築が健康でありますように」との願いからだ。私にとって、神事のようなものです。

(萬野光雄/近畿支部)

GWに見たいもの行きたいところ

編集後記

- ここ数年、日本の百名城のお城を巡ってスタンプを集めています、四国の東半分は去年回ったので、今年は西半分を巡ろうと思います。(望月)
- 混雑を避けて、のんびりと近場の野山をハイキングなど、新緑の季節を満喫!かな。(竹内)
- GWからは少しづれますが、この5月は松本のクラフトフェアに行く予定です。宿泊を予定している松本十帖も今から楽しみです!(関本)
- 若い頃は連休に合わせて友だちと出かけたが、今は一人旅が多く思い立ったその日に出かける。梅雨の日本を脱出して海外もいいかも。(大塚)
- 人込みを避け山梨県山中の古刹を訪れたい、標高1000mはGWが桜の見頃。じっくりと低温料理するのもいいかな〜。(知見)
- 広報委員会で卓球合宿したいですね。目指せバリ応援!(中澤)

- 5月末に竣工する物件があるため、多分GWの遠出は難しそうです…涙。(小山)
- バーディオヤスカルバを見たいと考えています。まだ妄想の段階ですが、パスポートは最近新しく取りました。(佐久間)
- インドから来ているインターンの学生を信州の田植えに連れて行くかな。(会田)
- 駅前広場の再開発で揺れる地元へ帰省の予定。孔雀噴水の引退は切ないが、後楽園をモチーフにした新しい景観に期待したい。(小倉)
- コロナ禍であきらめていたポルトガルに行きたい!でも円安で敷居が高いなあ。日本の山や自然を満喫する旅がいいかな。(田口)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
 関東甲信越支部 広報委員会
 委員長 : 田口知子
 副委員長 : 関本竜太
 委員 : 望月厚司・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小光山・井筒悠斗
 編集長 : 佐久間達也
 副編集長 : 望月厚司
 編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・吉田満・長谷川理奈・知見徹摩・立石博巳
 編集・制作 : 南風舎

Bulletin 299 2024 春号
 発行日 : 令和6年3月15日
 発行人 : 大西摩弥
 発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
 Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
 印刷 : 株式会社 コラボ
 ■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
 ・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>
 ・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2024



エコス
水平循環型リサイクルタイルカーペット「ECOS®」



ロールカーペット



置敷きビニル床タイル「AVANCERA FLOOR」

あらゆる空間に、 イノベーションを。

業界の先駆者として、ホームユースから
公共施設、オフィス、ホテル、病院まで。
あらゆるニーズにお応えします。



ツータックツ
塩ビ織カーペット「2tec2®」



カーテン



ラグカーペット



〔製造〕 住江織物株式会社 〒542-8504 大阪市中央区南船場 3-11-20 <https://suminoe.jp>
〔販売〕 株式会社 **スミノエ** ■東日本開発部 / TEL.03-5434-2928 ■西日本開発部 / TEL.06-6537-6317